

連歌茶談別集

中村俊定文庫

文庫 18

26



連歌茶禮別集全





連歌茶談別集跋

わが白雲充大和上の筆を以て
此連歌茶談を以て道小あそぶも
の如くは相成て先於君上人
と抄えられたるあそぶ也書せし

やとあ前後續残のほもは察いん
 はまきまに梓おのせ也大
 仲別集をもたぶく即そ本お
 のして長舟の廿二につもく
 まふ志きいそむけぬわぬ

ちいふまのひさのゆい
 いさかひはむもむらいで
 東の斜敷よゆるまはむら
 とても老だかあまむら
 に字津志らりてたお屋けがぬお

中らねる世の世道への心人
 乃き先よまのたの思ひ形を
 為花さくは花あぢふや兼文政
 八年のあまの武月花をよ
 くふ今くは法師龍野志花書

連歌のうらまへ
 かのうらまへのうらまへ
 かんあつて兼あつて
 らいのうらまへ

簡と云

廿二
 廿三
 廿四
 廿五
 廿六
 廿七
 廿八
 廿九
 三十

廿一
 廿二
 廿三
 廿四
 廿五
 廿六
 廿七
 廿八
 廿九
 三十

かたむねし...のさかすかたのさかすかた
かたむねし...のさかすかたのさかすかた
かたむねし...のさかすかたのさかすかた

かたむねし...のさかすかた

又政宗まにゆり庚辰の

五月三日の日後茶亭

香花園子

かたむねし...のさかすかた

連歌茶談別集

○
平家物語第六卷に曰白河此院より祇
園女御のたらみきまつるを忠盛よく
だされり其のちに男子をうゑりあ
る時きこもる屋ふよいくらもあま
るぬうごを袖にもる入れ御前へま
いかしこまひて

いもづ子もたふ程よこそなるまにたれ
と申されまうたれバ院やうて御さ
ろえりて

まごもまごりてをーなひよせよ
とぞ付させまうくあるけわう君あ
まりに夜なきをあらまひーうバ院を
こーめーて一首乃御詠をあそむひて
ぞくぞうれある

夜なきことまごもまごたてよ未代よ
たよくさかあることもこそあれ
それよまうしてこそ清盛ともなるら
あれといつり

案ぶるよけ連歌和歌のこと盛衰記
六れちもむさう今と異なるといつど
も和歌乃姿も連歌れんも同ト様なり

連歌集

源平盛衰記第卅七卷は曰右大將家此
 京のほろ乃御ともにはさぐみの國まり
 こ川をわらうたまつりたるよかぢも
 ら少用ありて片方に下るぬらりある
 が御ともはさぐらぬと一むちあて
 うのちどにけ川の河中はてせのさ
 たてまのまきりたるに沛ハイ艾ガイ乃馬よて
 鎌倉殿は水をさくと蹴うけきてまの

る御氣色何くしてまことにらそかつり
 たまひきるるるは梶原

ままこ川もれむそなみのあぐらもある

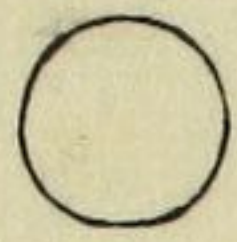
とつらまのまてたけなをゆるまもくあ
 れば御氣色なをままひてあれむそ
 なまのあぐりあると二三返えいとた
 まひてむかひれまにうちあぐら馬
 乃かいらをうちはらよ引むけて

かゝる阿くも人やるらん
と付たまひ多るといふり

案ぶるよある人の話にむうー飛鳥井
殿まりこ此驛よて草履をかひたまふ
時阿さひのきうたれバウク

まりこやらの喜たうくゆふらん
と口ささひきをまひたれバむいあんな
つもの中よりかく

あをかひきをまへさたよ阿まく
と付まるといふこと云うたれもたも志ろ
記ことあり



古今著聞集第五よ曰基俊城外くある
事阿またりるに堂れあるよむくの木
あり其木に六歳斗なる小童のやりて
むくをとるてくいとるにこくをむ何

とりよぞと尋もれば登しろ堂とやと
答ぐるをばて基俊なにとなく口とさ
みよ童にむうひて

これ堂も神う佛うにぞのか 那

といひまうもればこ乃童うちさして
と里もあはず

ほうーみこよぞとふづかまたる

といへりも基俊あさまーくふー

に受てこれ童もまごめものよへあらず
とぞいひある

又曰いろはの連歌あまたるに惟とか
やがうよ

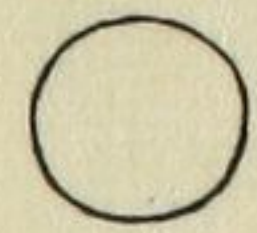
うれーかるらん千秋萬歳

とまうまたるよけ次句にの文字よや
つくべれよて侍るゆくーを難句にて
人とあんどわのらひまうもるよ小侍

従つけある

おもころひあまの子乃日とかぞいつ

巳上



吉野拾遺第一よ曰神無月此比當今人々
めさせ給ひて御ゆめのつねてよ我朝
乃うたの古今集後撰此比風骨ふうく
えならぬ歌仙もあるとらら其後いみ

一と歌あまの撰集よみえまう濱此ま
さごはりふめれといふやう乃うたのみ
なれをうたうたのこのといとめづ
ら一からず應長此比より連歌をもて
もや一ていうめ一さるなどあまのつ
らるものなを朕よりくられをとて
遊びけりどの歌をよそす一て連歌を
のこ深く樂一めりこよひ人々も祭白

なごつかみまつてんやと作られて
遊させたまふ御白よ

月やあるありあもれ夜乃夕えぐれ
又いとさうかなしき御心を

せくあるもさらは時ぬれをどり哉

御二白あそむし免給ふて人くもつかみ
まのらしめままふ

ちれづぬ神もあらしれおふ哉 隆資

花をさへ忘れぬ風乃とみぢうぬ 實世

色こたへあらしちかき落葉哉 親房

落葉せし梢よつめる嵐か南 女房

け外敷多めぐらしさるどもあまつれ
ども覚束なくてかたしらつといり

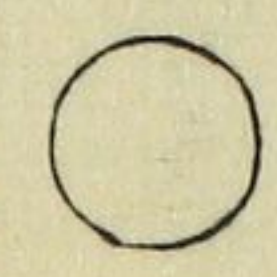
南畝秀言上よ曰

世よあもれらに時ぬれをどりうぬ 宗祇

世よあもれらに宗祇れやどりうぬ 芭蕉

け二白人乃ある所なるを按むるよ吉野
拾遺後村上院此御句よ

世くあるもさらけ時ぬるをどり哉
この白人此あるものまれなるよといふ



落書露頭よ曰先年梵灯僧の鎌倉に侍
まゐるころ関東此上手よて信夫といふ
人乃餐句よ

ぬるごに露なるを松乃あらう那
梵灯僧此餐句に

ぬふりて露なるを松乃あらう那
是を愚老よ何る人乃修りう

ぬるごに露なるを松乃あらう那
とやまを按むるよ信夫が句よさう當

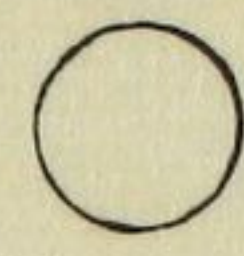
たる道理よて上手とゆえを梵灯乃句
と一節ありて殊に勝るを有人の語り

一 ぬきつてなれば松は嵐をぬきつて
て露なりとあつるたぐみなる句なるを
三句ながら一理乃叶するにてあるをぬ
同ん同句よてふくもあるべうなり
と存さぬけ乃事とその句にさし當て
急得べきことなりといふり

二 言抄は曰謹和歌所の人と御中に
作詠歌にうき詞とたぐ詞とのかちるを

めらいうなるを可申そや今時地下れ
連歌は近浦近嶋葦霞など様の自由乃
事仕ゆ是と遠浦遠嶋夕霜などくも中
うへはそれを引強よてをさへて中
にゆこの類になくさこえゆなり和歌
も若ぬけのをさへきする詞をむし
詞とも可嫌ゆやらんといふり
辨要抄は曰凡撰集に入らる事ハ三

此ふられある一よき上手人二よき
重代乃歌人三よきけに執ふふりた
人これ三の外乃人ハ入られざるこそ
なりといふり



小夜此祢さ免よ曰連歌とりふこと
歌よむ人乃ぬむことになれり是もい
うとぞ免ゆる為氏卿ハ日本乃もの

上手を唐國へつうはされば我身も連
歌の名よてや人此國までもわづるべ
きなど狂言やされりとかや後鳥羽
院乃御代も連歌の上手をバ柿本
の衆と名付られわろたをバ粟本乃衆
と名付られ侍りき柿本此長者となる
ことなる嚴重此事ぞうー同ドた御時
と祢ぬもの百れか多ぬのくちるも定

家卿も四十とられまるとぞ日記も
傳る爲家卿も齡たけての歌案トて
くるもむげうーきとて朝夕連歌をの
みせられらるとぞ歌りー後嵯峨院に
御代も辨内侍少将内侍などいひー
女房連歌ーにていとほくーた事
ども傳りさげごろ地下にのと翫こと
よなれるいと無念なるわざなる連歌

乃ことと歌とたがひらばまゝ歌の
庵うに朽もあらさるどめくせられ傳
れば子細あるまじたは歌に毒とて一
向にまてられ傳るも昔よはたがひを
る事よこそ詩作る人の聯句嫌ことと
いまごなき何とて歌よみの連歌をぬ
み流ふやらん初んのかまこそね用ん
も傳る處られ口もんもさごまるとらん

人乃連歌にとられまますふことやハあ
るべきとりつり

○
二根集第一卷ニ曰

つらをみるもむらあられなり

とりふりに

なぐらぬ筆に命もたーかれや

名号連歌此時け付句紹巴も昌叱も同

トくほえられまきりとりまきり乃連歌も
かへうよあれば面白きものなり硯此
銘に 硯命以年筭 墨命以月筭 筆
命以日筭

又曰宗長云連歌も一貫文の扇此ふる
たより百文乃扇の何さらーきごとく
せよとやされーなるはものがるを常と
察句も付合もも意得ある扇ー

宗祇竹林集

同第ニ卷ヨ曰宗祇云長歌のをもゑよ及
歌あるものなりそれハ前此長歌乃こ
とををりひまのるものなり連歌此
付句も及歌のあうにまゝ前句此こと
をををえたとてゆくのなり又曰
千もなきまの霜雪乃を
とりふるよ
あはで誰あうつに深くかふるらん

宗祇竹林集をえらむれ一時房子衆へ
をのく面白とあふ句を書出してえ
せよとあり一うハ兼載は連歌をつか
えられバ竹林集よ入られず祇公云
よひに降るもあまでかつるともいばん
暁よ降るをあはでうつるともあはと
ちり同第ニ卷ヨ曰
山もみどり此春ふたいろ

宗祇竹林集

とりよるに宗祇付て

かきみこぐ海士乃舟舟とをた江よ
けりも我もあらず出ゆるとなる前
へもあなぐち思ひゆるるをさ事もあ
上手乃あわざ自然此ことなり是を
よふを又曰

かならずれん志らるるこのゆふべ
宗長云ねも志ろた大事の前うとて宗

牧周桂へ付させられまゝり周桂云

のちれあーた乃一筆れあど

宗牧の台ちわをれまゝり宗長云

ならんぬ人々何まゝるらん

かならずれ付様ねも志ろく

又曰宗祇追善れ宗碩乃察台よ

りふをかむむも志ろれよ萩乃露

宗長云萩も志ろれやまら物なれば志

ほれ那とせびよろーかるべーといへ
王宗碩云今日中を去られよとらふ乃
哀を萩よまらせてりふなりといへ
りづれも上手れ白作なるを愚案肝要
に

又曰周桂云連歌を伊勢物語源氏物語
等れ面白き古歌乃風躰そのかどく
をとりて付い得べれも去らたものな

とあまりに付過ゆるよろーからぬこ
となるよといつり宗牧云連歌を前句へ
よくつあんき免なり付ざるもよろー
からずといつり宗養云連歌をいひつ
るもわろー又うたをるもわろーい
二乃中に大事へともれをといつりい
づれも名匠れものがつるを

同第四卷よ曰智溢法師連歌の学問れ歌

朽きくよあしを捨るふあらば
後悔ふど乃字ゆんをす

又曰肖拍れ達歌もかまらなる所なり
宗長のもぬも通るもなる所なり宗碩乃
もゆふなる所なり宗祇のもつけれれ
所をもかねきを

同第五卷も曰戸をたてし時に戸れあ
とよまあかりれさしられ兼載十七

八乃ころ岩木殿いひかきたまふ

戸をたてしこそあうくたるもくれ

と中されしを兼載とりあえず

とんまんの九つまでと血もまらで

と付きり小傳れ時より利根なるもの

とたつ

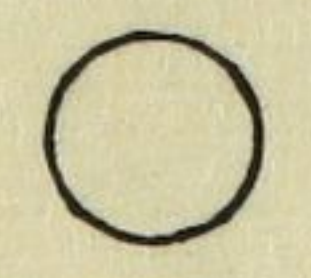
又曰宗祇存生乃間も祇公れ姿を繪に
写して画賛を所望しけれバ宗祇法師

通歌部別集

うのゝをく我がげなぐらをのうさを
えらぬ翁ぞ浦ゆれぬる

巳上

案むるは秋里籬岬が名所圖繪はげ歌
を載て辞世なるもとりつり續編に出を
うごごと



阿多物語上巻に曰まぐらうぐみの名を

まる鏡あさ鏡などいひて和漢ともよ
もてあそぶる又五月サツキに鏡も百鍊鏡レンキヤウと
て船中よて鑄たる鏡をりげうろを
江よつなぐ舟乃中よてむろーまれ
みぐく五月にうぐみなりさん
とよろーといもれある事なるをうつ
こ乃鏡もくくさられ人のみことになり
ー鏡なり野守ノモリの鏡もむろー雄略天皇

連歌茶談別集

百六

此御かまゝに終ひし時よりことたこま
て野もある水をけしたり乃野守に鏡
とりつり又徐君が鏡も人のふれうち
をてらせばを乃人こそぞまてほしがま
なればわが指とぐる事ならどとやつ
か乃まごへうけあるを野守の鏡とりふ
とも又野をまもる鬼に指まもる鏡あり
これも人のふれうちをてらしいみし

記まうらなればさる國王ありては鏡
をめまに鬼乃にみられ野ををさ
はらちんごに終ひし時ちうらなく
てまうりを野守の鏡とりふとも又秦
に始皇即位乃ころ深夜よ一乃鬼来て
一つに鏡をまもりぬわまもり三尺ちるこ
れも病人にまへにまのれば六腑五臟
みなことくをあらわれやまふのあ

まごころをまわれまを野守の鏡とりよ
ともけおせのくあれどりげれよて
とねゆんむる物よてかろくむる物に
もあらずこれのとならず神代よ素盞
尊のみこと出雲國へたをくまらる
よ手摩乳脚摩乳といへる夫婦は者一
人乃姫をもてまをいをまご姫となぐくは
姫を八岐乃大蛇ありて今夜のまねん

とうなぐくむそのと記素盞尊馬ねみこと
は姫を我よえさせば大蛇をたいぢらと
べくふく約束ありて程なく大蛇
をたいらげ終ひて稲田姫と夫妻は事
いやくく終ひく時わさる八寸めぐり
二尺四寸は鏡を撃ひきで物よまいら
せらるを素盞尊馬ねみこと天照太神へ
なり終ふ懿徳天皇は御代の時人皇へ

ゆげり給ひて今乃内侍所此御鏡これ
なる其後崇神^{スジ}天皇此御宇にいあらを
免て始の古き鏡をば天照太神へうへ
しまいらせられあさらしを今此内
侍所よれさせ給つりけ外八咫鏡とて
天照太神乃いさせ給ひまゐる鏡二つあ
りはしめいさせ給ふちいさたを紀伊
國ひさた此宮といわれ給ふ後の御

鏡も伊勢乃國蓋見^{フタ}が浦にたえし
ていづれもけ國のまがり此神となり
給ふうればたこ女によらずけ日
本よとあるいさこしもあるものた
から物も鏡にたたまれり又生をうく
るもの親をもまぬらさ
人の子もたやもゆるてみあるものを
免しを時りくみをぞえり

通説文讀別集

と古人もいひしは鏡をいやといふ
をどてたやのたもうげをもえ侍らん
や不孝れつみもあさすし外鏡乃を
からなる事た不し日をうさねてりふ
ともつたざる事なるま

又曰ほとくたをさむうし蜀此國のみ
ろど御名を杜宇とやまのる蜀乃都を
いで旅よてみまかまほひ其御魂魄ほ

とくたをに化しほふるとなりても國
やこひしくましくもん不如歸とな
さて旅人までを我方へかへらんよ
まろどととく免ほふ又も郭國といふ
國は王他國よて遠行志ほひくものか
くとも不如歸くとも啼ほふと
いふ説もあり又四年は田長とあがく
ともいふ

通説文讀別集

三十一

いくばくは田をつられむう郭云

去て乃たたさをあさなくよぶ

とよ多るは歌せしくたけし去うれ

ども四手乃山より卯月さ月に来まで

農をさく免て過時不熟となくうほと

だきとさこゆそれゆへ四手は田長と

ゆふとかある物あまさもありぬべし

事や又けを死出は山よりたむさといふ

いふれを古へよまひつたへき事

あれどあげられべのこしゆり又ける

を詩歌どもにとてあそべり或も

一 聲 山 鳥 曙 雲 外

とつくま又も

二 夢のこころすえいでど郭云

いく夜あかーれとまのちなるも

なごくなが免をのこされゆる

通歌考諸別集

又曰七夕をいふ一遊子伯陽といへ
る人鳥鵲ウヅノシれ二つをうひ給ひ一なり後
夫妻の人天よのり星牽牛織女ケンギウシヨ乃二星
となり天れ河を隔て住給ふ常々水也
ぐれ有とてけ河れわさるをゆるし
まゝとす七月七日と帝釋善法堂タイシヤクセンホウダウへ行幸ユキ
ふ給ふ日よて水あび給ふ事なされハ
二星乃わさるをゆるし給つり其時む

う一れちなみをわとれずけを来て翅ツバ
をならべて橋となりてぞわさるる
わくれの時七夕血泪チナナミダをながりたまへ
バ翅とみぢの色ままがふゆへ鳥鵲紅コウ
葉ヨクれ橋といひならせせり
同下巻に曰占方ウラナヒカタもとあななくありか
免れ占く一乃占つど占うど占とされ
占ゆふもらふ占はい占みちゆた占と

連歌考諸別集

三十三

通哥茶言別集

ち占ありー占いー占ろーろれ占うた占
などりふあり又山とぞ占られも山と
ずのをむむとびあはせてまのそのを
ををかんなどいむとをせてうらなふ
事ありとりり亀れかろ乃占るト部
氏れものはわろ乃本をのりて亀のかろ
をやたてうらなふ事ありかぬく占
られも志れかろ乃骨をやとてられ

もはわうれ木よてうらなふとりり
むさーのようらぶかひやたまひてに
いのらぬ君が名うらよいてりり
なごよえつ又天照太神岩戸にこもる
ゆひーとた天香来山れ鹿乃かこのほ
ねをぬきてはわうれ木よてやたて太
神乃いてゆらん事をうらなひーとな
る又俊頼れ歌よ

連歌茶言別集

三

連歌文語別集

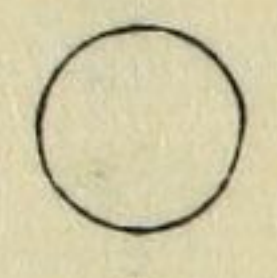
三十四

神風や三角乃柏カシにこそくひて
まのをま袖よつみてぞくる

是も伊勢太神宮にて三葉ハうはをを
まてなぐるよたてばあふ事かたひきく
ぬさうなまぬなりまのを袖よつみ
てよろこぶなる又續古今れ歌よ

たもひあまのさののかしにさふことれ
まのむようくいなみざなるまらり

とよあがり是もかしを氷ようかづて
まのめばうなはずうかづばうあふま
あることなりけおいろくれせのあ
れどまのまればのこしゆるとらり



往生要集第六よ日それ人間も業と果
とたしうのまて生所あひるまづつ
れば六道のうちその人も今もいらな

連歌文語別集

三十五

通言詩別集

る生をうけてらびくにありともあら
づるちの野乃あづむの山れ多を催々
らたのむれたやちのまことちのまことあらん
や古歌よこのふをよみゆるにや
ころくとなくへ山田れほとくたを
ちにてやあらんちよてやあらん

已上

案どるよほとくたとも不如歸ともな

と郭公^{カウ}ともなと過時^{カシ}不熟^{フシユク}ともなくと
りよ悦もあれどもころくと啼とらふ
事へは歌よてとて免て免字せり若く
くも過時不熟を義訓してころくと
よむにもやあるらん更よるぬ庵

誹諧破邪顯正よ曰それ天竺れ靈文を
唐土乃詩賦と一唐土の詩賦をゆりて

通言詩別集

三六

通歌詩別集

我朝此歌とをされば三國をやとらげ
まゝをもめて大に和くとかきて大和
うたとよありと白樂天乃謡よあり
文言人間の作にあらず住吉大明神此
神徳ありうかと思得ぬれば何事もた
はことよなれま和歌灌頂神道灌頂と
いふ事あり是に何のうらざれば神秘
乃まことを人のある事よあらずうく

いふ我もえららずえうれども太神宮岩
戸にとらえりまはひを八百万神をげ
たはひ神樂を奏して舞たまふ其時面
白やとのはひて和光の御かぶ頭れ日
月出現仕はひ常闇に國二度照したまふ
あ今れをまでも日本もひらもたま其
神樂といふの和歌ありされば神舞と
て定れるはなり和歌をもめて神舞と

通歌詩別集

とけ和歌二つよ分て連歌とを是則二
 柱乃神祇外宮内宮天地陰陽日月君臣
 父母此妙躰なりさるに依て上乃白も
 下れ白も一白くく此ひとるもちせね
 べ連歌とりよものよあらず天と天地
 と地君と君臣と臣別く乃各式を何ら
 ととけわうちをさ時と天地くらやみ
 なる連歌も詞を艶葉よりて下愚の輩

たやましくまぢびがこたよありそれく
 生つされを俗乃ことと取もなをさず
 乃理をいひなぐさむ是を誹諧とさる
 詞もかたれども和歌も連歌も誹諧も
 毛頭らける事なり乃理かたらざれば
 妙理も又同ド中よも誹諧も大さよや
 たらだまるそのうへれやたらざたのれ
 ば是を和光同塵此神祇とりよたのり爰

をものてあるべし天下泰平にたさま
まままへる事いたぐ和歌の明德なり
正乃れことた濱乃真砂れりどなれば
なごういひつくし何う古き事のあらん
古き五文字をたとへば月夜よりとあ
るを月やより月もより月より月よ
しやなごいひうへても各別れんかを
れり異様の新したるよりも實方れ傍

古めうしを祭るもまさうりてあらし
くまこゆるものなり花も春毎よひら
た月も夜ごとにくまなく郭公乃喜ゆふ
べれ鹿を癒て万木千草幾年くくある
といへどもまよかたる事なり花もち
まてま又また月も入てま又出る各別
乃花もさうず異風なる月も出ず花れ
まのちの色古今同じものなりけ付合み

な古ーとてさらちんやを間よ有める
誹諧乃材木もみな古人のこぼち屋な
まそれを拾ひあひめて新ーくとりつ
くろふを作素とりふなるを先達好士此
伺も古くーてんを新ーくといつる名
言随分わきれまぐさ事なりといつり

○
石山紀行は曰去年此秋乃比源氏物語

の事などられうれ物がきりーて八月
十五日石山寺にてうれ式部が筆をた
てー昔此事或説ながらうるまつきへ
たるあられ通夜ーてかーこ乃月え侍
らむやとちて既もたもひまちーうど
もさちる事ありてむなーく過ー侍る
け事を金后さこー免ーつけてさらば
糸指あるべたゆー何まな来この物語

よふもつりて蓬屋よ日くたをしま
 して後中一部の功をどげたけし
 てりり又宗養法師紹巴法師られも同
 聴乃輩をればいざなひ侍りにつ
 らよ日旗をくらんもふりかの源氏
 此間乃あゝまよて十百韻此連歌をど
 かせーうべ不堪のうへ老懐いういど
 朽もひながら驥此尾につくべきし

かせーよあうらべ察台乃題よあか
 物語の目録をど中て若菜此察台を中
 出ー侍ーうべをのくそのんを朽も
 ひめぐらー十此察台をさだえてこと
 一天文正四年八月十四日に朽もひま
 ち響なをならべ侍る千種此いろくを
 みなへー乃色よまがへる粟田山うち
 こえあるもあらぬもまちとまする相

坂此関をこえうち出乃濱などまぐる
ほごよりをのく乗物をうへーか
御寺にひのどの時をかまよつさぬふ
うくあのみびてとちさだ免て行さた乃
宿坊などかねてちさぎむる事もなく
て玉藻刈ふくうぢよて寂中の月も又
るべさよーちて集りつたてかの源氏
乃間よて足をやもと免さてこくかーこ

坊などるるに世尊院とてまぐるべ
る坊ある人ありてをーへるにま
るてえめぐらーあるよあまにぎを
してよろーた所あるれど海山えやらる
所もあらずいづとて又るあまさー
に倉此坊とやいへる月此ま免ま
いづなる名とたがえー曾子へ勝母
此里よ車をうへー漢高祖も柏人よ屋

どりをとらざるた免しあれどかの貫
之がきみ野乃嶋此名もろくられぬと
もあればたち入え侍るに東は岡山あ
るふもとも湖水いろこたひねどもえ
わさされて額も洗月と何そ又一休
老師江山一覽と題せし墨跡もあり江
山景氣玄の系及びがさし後普光園撰
政此月も山風ぞ志ぐるくとありし連

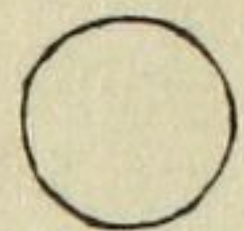
歌の會席もい坊とぞ中傳へりるこく
にまぐる所あらど四美備まる所此さ
まよてい所とさき免るる大くさ干白
なごの會席は比乃風とてわがらと
し事あるしうごられもい四人此ん
ざしむうしの高山乃跡を尋ね薇など
ばうりにて日残をくまぬべたを金后
の御さたごしてことよびさししくな

まぬある時を坊よる御まうたのひ中な
ごして朽もひーにもたぐひて十五日
よりえど翌日毎よ二百韻づゝよて五
日にこそたへぬ執筆よる裡文仍景い
づれもふざー乃人なりーをかさらひ
かりさても夜をへての月れちう紀年く
にこえきふる清光まことに薩埵の光明
もそひらるにこそとみえーゆる日も

一日逗留をべきふーやて世尊院よて
百韻の連歌あり廿一日舟よて還向ー
ゆると奥遊ことにさまぐたるを舟よる
あがりてぬよあひてろくろくに何
まつてみーてきちわうれたりされも
盛者必衰れことをまるとをのく感ド
あつるといり

案どるよ木曾路名所圖會第一卷よこ

此紀行をのせまると



かどうも産衣よみえきれども委しう
らず山海名産圖會第四よくとくくろん
どて細書六七葉に及べし其中のこく
ろを採摘して云かどうとりよ名も古
き和歌物語等よるることなりきり連
歌乃季寄よるるのこなり其餘俳諧は

季寄三才圖會大和本草等にみえきり
按ぢるよ河鹿カジカ名目も俳諧師など乃
口どさみよいひとド免て恐らくハ寛
永前後の流行なるを西行は歌など
いへるを作し出して人に信ぜさせし
よもあるべし既に俗傳よ西行更級に
住る時よよ多るをとして

山川よ汐はみちひるあられり

秋風さむくかどろり啼たる

は何れ書よ出せる歌とも志らず又萬葉集の歌なりとて

山河よ小石なぐるくころくと

かどろり啼たる谷乃落合

是萬葉集にあることなり或説は落合此歌とよみて大原に建禮門院乃御詠たるると云傳ふも何の書よのせきると

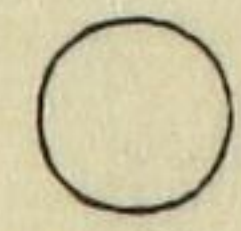
も志らず再考するに加茂真淵古今打聴よ云今此俗にかどろりとりよものもいに一乃かたらずなるべいと云云愚按ざるよかどろりとりよ名を俳言よりて歌によむことなり若しよまばかたづとよむべし萬葉集よ

たもあへずまよせる君を佐保川のかたがたうせでうつるかも

又長明無名抄といつる井堤れかぢ
是なるべし田野陂澤よをみてうたて
かしまし蛙るもあらず後をもの
とらざるものをよむはいし
此歌をあらざるあるべしかぢなく
吉野川かぢなく六田れ淀かぢなく
く神奈備川かぢなく清河原なごよ
てとくく山川の清流よのよ採合せて

みな夢を免でしものごとくせえはづる
なり田野陂澤れものを後すること萬
葉一編よあることなり井堤をよむも
古今集にみえて六帖も載し歌なり
かぢくかぢくかぢかぢかぢかぢて名も
俳言をすることある魚し諸國よかぢ
うといふ魚も品類をくなくならず
ちれ大小いろれ黒班等少とづて遠ふ

ちるる圖は十種を出さざることといふ



鎌倉志第六は曰昔建長寺は廣徳庵は
自休といふ僧あり奥州志信乃人なり
江嶋へ百日系指しけるに相兼院は白
菊といふ兒られも江嶋へ系指しける
は自休邂逅してありいづれもして忍
ぶるべき便をいひられども其返事だ

よなりねさまぐいひまされれば白菊
せんかこなくて或夜まざれ出て又江
嶋へ行扇子に歌を書て渡守を頼と我
を尋る人あらばえせよとてかくなん
白菊とあのおれ里乃人とをい
思ひ入江乃嶋とささへよ
又一首
うたことを思ひ入江は嶋か夢に

捨る 命 も 波 の 下 草

と詠ては淵は身を投まり自休る来て
け事をまかしくあひつゝあつる

衣 襟 只 濕 千 行 淚
娥 眉 翠 黛 接 塵 沙
花 質 紅 顏 碎 岩 石
十 有 餘 霜 在 刹 那
懸 崖 嶮 處 捨 生 涯

扇 子 空 留 二 首 歌
相 對 無 言 愁 思 切
暮 鐘 爲 孰 促 歸 家
又 歌 二

白菊乃花れなさけの深き海は
ともに入江乃嶋ぞ姦しき

と詠て其まゝ海は沈とらん右に詩歌
も滑稽詩文と載するといふ

○
觀鴛百譚第四曰定家卿此小倉色紙
百人一首と號して和歌乃乃最上乘を
其自筆の色紙今も直千金なり是に
付て異説あり老人雜話とりふ物と載
するも近世まで伊勢此國司北畠氏と
屏風一雙に張て全くありしを宗祇第
子宗長勢州に至り時國司乞を与え

其意も乱をなれば其國も危く兵燹
此恐も有るゆへは名物をまんとむるな
り宗長其旨を會せずしてあつるに辞
して一雙を交てさるぬ伊勢とありし
も果して焼失せり宗長が五十牋のこ
もて世に散て今乃宝となれり紹鷗乞
を得てあまれば原と八重葎を表装して
二燈とせりところや又一悦び百牋東野

連歌茶詠別集

州まで段々傳へあれり然る紙茅子宗
紙詠をよむにゆりて五十歳をよへり
り宗紙又我門茅は一枚づつわうちて
自ら只一を残せり野州まで感祭一我
方れもみな人よ頌ワカチヲタ与へりるとなり知
慎れもへり後の説なれば百歳皆在に
散まらなればやあるべしもれなり今
乃至てまくなるとをえれば前乃説えり

る處をいひつり

集古十種よ曰定家卿真蹟小倉色紙
こひきてふわりなほまゝの記をちよりの
ひとあれまことそねもひそえり
あさちふのをのゝ志れをら志乃あれと
何まるまでなとつひとれこひり記
さいひーさいやとをまぢいつてなかむれと
つりこもたぢり秋れゆめられ

連歌茶詠別集

四十一

新古今和歌集

こぬひとをまの川のうらたゆよなほ
やくやもーほろ身もこうれつ
さみうた免たーうらさうーいのちさく
なうくもか那と朽もひぬる哉
君うき免春乃野よいてわかなつむ
我衣手にゆきとありつ
世中よみちこそなあれ朽もひらる
やまのなうよも志かそなくたうた

や魚むくら志される屋とれさひーたよ
ひとこそみえねあふとたにりれ
まれまうも志るひとよせんたうさこ乃
まのもむかーれととちうら好くに
それやこれゆくもかづもわうれつ
志るもあらぬと相坂乃せた
まのこのた乃へれさくらたよらま
こやまのうをみたさもあらなむ

新古今和歌集

わさくらも身をばねもたすちうじてー
 ひとのいれちうけーくもあるか那
 夏は夜のまの膏なうらあぢぬるを
 雲乃らりこよ月やさるらむ
 えよーのやまのあたうせぬよあけて
 ある郷さむくころもうけあるま
 あひえてれのちうころよくらあれた
 むうーほものともたもたあつらぬ

うまもあまのくわむたさたおたうーよ
 ちちーうれおらぬとらぬとらを
 ゆらのこをわいほふなひとからたえ
 遊く急とちうぬこひ乃みちうぬ
 をくらやまみねれとちもころあらは
 うまひとまひ乃みあまいなん
 有るれつれなくみえーわうれより
 あうつたもかつらうぬものほあすー

百一のちをよむのたをれきうふよも
 程あまのりあひむらうーちあまのり
 あそれちのりもあまのりはたもほえて
 身乃のりしらはあまのりぬるさう那
 わされーのゆへもあまのりはかゝられた
 ちあまのりたうれい乃ちちもか那
 ちあまのりもよたえちあまのりあまのり
 ち乃あまのりちのよたあまのりあまのり

いまーへの奈良乃みやこれやこさくら
 ちあまのりはよにちひぬるう那
 ちのちはうのりちのりあまのり
 わう身をよめるなかあまのりまに
 かくとたよえちあまのりちあまのりも草
 さーとあまのりーちあまのりちあまのり
 あらーちあまのりちあまのりもみちち
 ちあまのりは乃まーちあまのりちあまのり

田子此浦よりち出て見れハ白妙れ
 み〜のきうねにゆきとあつまつ
 朝ちらあ有め乃月とるるまでよ
 め〜のこさよあれるあらゆき
 見せえやなき〜まのあまれそてたよも
 めれにそぬれ〜いろをかはらす
 あまのそらあまをさげぬれいかさうなる
 みうさ乃山にいて〜月かも

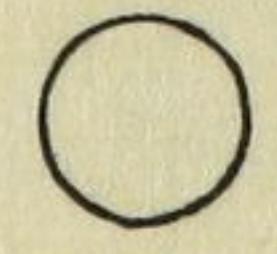
さみうきを免たるの野はらて〜わうあつむ
 我ころもてにゆきとあつまつ
 となきそ〜あら〜れよは乃ゆきなる
 ふるゆくものは我身なりなる

已上世三枚

い色紙をその家く乃重寶〜てなが
 く傳〜ものなればもこゆる優劣れ
 論も及むずまいて億見乃取捨をべ

る事にとあらずまゝ温古れまゝに
なご舞とてうるにあゝぐひて収入を
ほのゝといつり

案どるゝ群書一覽第六卷に雑書部は
集古十種乃略目錄を載まり是その一
なり



東遊雜記第十九卷に曰

後人あらず

みちれくのそと乃濱なる呼子を

なくぬるまゝいふまゝふやをか

前々太平記も呼子もも厚れことに

てウタフも呼こゑヤスカタも答める

まよて母も乃をにてウタフとま

雛の巢れ中よりヤスカタと答ふその

まを相圖は母もをよりりて餌をあ

まふと有り和漢三才圖會も呼子を
も鷗北屬もて水禽乃部と記しきり
藻塩艸とりふ書もいふ古へハ伊
勢北國乃海濱にきみしきよて子を砂
の中にうくしてうみをく筑土人さざ
し取て太神宮北神供よせしとあり又
遠近のきりもあらぬ山中に
たがひなくも呼子をう那

とよみし歌より呼子を北傳ふとてい
ろく乃埒もなき事なりい傳ふこと
あり馬鹿らし記事をなんのう北とて
穿議もるも今北を乃風俗よて傳受物
こくこといふも日本流なりみちれく
のそと乃濱なる呼子をなくぬるまの
うきふやをかこと續しハ外濱迫も目
出度御代ありとをを祝せしよみ歌を

る處といつり

又西遊雜記第七卷に曰太宰府天満宮
と普くをよめる所は本社として社堂
乃綺麗なる事美をつくせし御普借な
る社前は飛梅一夜の松阿を宿願はあ
る人と連歌乃奥行をして神意を慰免
なる事なり當社の古例にて百韻を興
行するものと金子五あ五十韻と三あ一

おと壹あとい直段ありて其日は至れば
別當社僧會集して懷紙を認て神前へ
奉納し施主へも後を奉なり是を大神
樂代りなりといつるは六月十七日は
をかさた乃連歌とりふりし御朱印の
社領と千石なり外に福岡侯より三千
石の寄附地ありて都合四千石なり東
都東叡山に屬せし社頭として僧坊五

十六院三大宮司八祢宜三役寺等阿多
明此薩大錫が社へ奉納せし詩あり
とて或人所持と

無常説法現神通千里飛梅一夜松
萬事夢醒雲吐月觀音寺裡一聲鐘
明此洪序が詩よ

日本曾聞北野君愛梅満酒又能文
謫居西府三千里一夜飛香渡海雲

土人此物語にりりこの比よやあるも
飛梅乃白ひ妙なるをそし毎葉を打て
家にうつり續本せる人ある或夜の爰よ
なさをなくお人つらしわが宿れ
あるど忘れぬむ免乃本を急を
け介御神依にりそのかみ急のさき
にて後せきまふ歌よ
青れまや都乃をよとみもせて

ころづくーのありぬれ月
あられ乃深き御依をそそのくち安樂
寺へうの里移ひーなりといり



假名遣近道又曰大略こゑによむ字れ
下をいとよむと端乃いなるべーらん
よむ字のとれ下をいとよむとひれ
字なるべーたとへべせい性さい方ら

いそい禮拜たいない胎内さいく細く
等なりれひ生とひ問たもひ思よとひ
齡ちかひ誓等なり中れぬと下のひく
と數あまるとよかよとずきとひとさま
によむものもぬれ字なるべーられな
ぬくらぬたまーぬまとぬ等なり又ほ
成をこよむと其字のこゑをねてよみ
きるとほ成をこよむなるべーたとへ

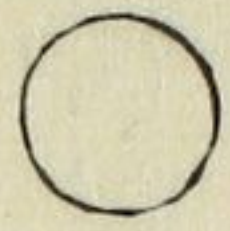
バ志ほ塩多んとほ竿かんいほり庵あん
かほる薫らんいとほ巖がんりのは焰
多ん等なり又へれ字もふひへにかよふ
文字なるべーたとへばれもふれもひ
れもへいもふいもひいとへねぐふね
がひねぐへ等なり中れえ末乃多もか
なつてたうさやとたよついで用ること
もあるとみえきり又をんなの時も

とーれをなるとこの時とれく乃れ
なるべー物れ音とりふをの字も皆と
ー乃をなり鐘れ音風乃音等なり物乃
緒とりふをの字もりづれもとーのを
なるべー琴れを念珠のを袋乃を等な
る生類の尾乃れ字もりづれもれく
のれなるべー馬のれ多れれ魚乃れ虫
れれ等なり御乃字をれとよむものも

皆にくのたなるべー又むれ字をうと
 よむも口をむとびてよむ字もむをう
 とよむなるべーむ免むまむもれ本等
 なり又うれ字を下にうくものも下乃
 ひいた數あまこよよまぶるへ皆うれ
 字なるべーまこへバきう信ほうー法
 師きうたう堂塔れー料紙せーく
 少く等なり又ふれ字を下にうくもの

も下乃ひいたあまこよよまぶる
 べーたこへバれゆふらうふよまふか
 まらふまのろふ等なりふれ字をゆと
 よむゆのちをーあまぶるへあまこふ
 等なりいひれもゆとよむゆー想じて
 こ急をかくらうれ字なりよみをう
 くにもふ乃字なりいの字ひ乃字も亦
 ぶらうれ大略なりいぬひほをたな

どをかたよ書て字なるをわろさもあれ
べたもひの介よかくこともあるを
右へうにうろへてうくべし是近道
なりといり



慕京集よ曰細川勝元朝臣短慮不成功
と昌黎のつくりし云ふなど消息れ
しに書つてはけろくもえはとひき

まひーうぶ

いそがついぬれざらまどを旅人れ

跡よりそも野路の村 ぬ

又曰康正元年れ冬藤澤乃役よりり
てかたも味方もりりまどを三日を
うさねていどみあらそふ事になりぬ
味方乃藤原重頼かたれ首をとるて
わが陳よ来てかしくなんとか

あまのくにまづむ壮年よもきくらぬ男は色
あろくしてたけきくくるべきふち志
たり鬢のあくるたぐならずきたて免
つあをれもいやまゝあごながらに
くうらぬたもうげなり重頼このふを
へれやさしき歌ひと物しても向よ
とまゝ免侍りたればその首にむうひて
かるとたさこそいのちろをうからめ

うねてあまを身とたもひ志らす

已上

案どるよび歌を俗間北軍書等に文明
十八年七月十二日太田道灌鎗付られ
なぐら最期のよき歌をとりふる誤
なり群書一覽第四家集部にも沙汰あり

○
山州名跡志第八曰京ノ北野ノ連歌

所ハ經藏ノ西ニアリ門東向毎月二十
五日此所ニ才井テ法樂ノ連歌ヲ興行
ス衆詣ノ道俗列座ノ禮義ニカ、ハラ
ズシテ吟ウニ句ヲツグ依テ笠カ著キノ連
歌ト云ナリ

同第十一ヨ曰誹諧師貞徳ガ墓紀伊ノ
郡鳥羽ノ實相寺ニアリ石塔ノ銘ニ曰
道遊軒明心居士兼應二年十一月十二

日傳ニ云卒スル年八十二歳ナリ其ノ
辞世アリ ツユノイノチキユルコロ
モノタマクシゲフタ、ビウケヌミノ
リナラナン といアリ

○
都名所圖會第三ヨ曰貞徳翁ハ童子た
りト記妙蓮寺ヨテ連歌執行ひハに
九條殿下尚實公ならせたまハくテ

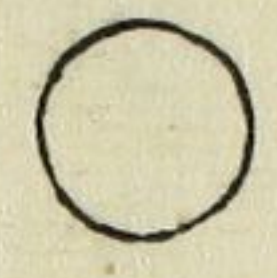
連歌本談別集

卷之六

御祭るよ

花に花みちかそつんゆくゑ哉 殿下
 春をかきとにひうれぬる神 貞徳
 春をさかきとにひうれぬる神 貞徳
 春をさかきとにひうれぬる神 貞徳

巳上



和泉名所圖會第一よ曰春後艸云さい
 つの頃うちれ帝乃御ゆ免よ先皇此御

代御連歌あるべしよて祭るよ肖柏法
 師中べたよーちよーらば先うちく
 に御覧ありたさよー當代の作事なるよ
 ーよ祭るにをたてよ當座よ中べー歌
 此ふに同く風情をたもひめくらー侍
 るとて

あー引の山とをよ月をたよをたて
 月うさささ末乃かけをー

とりふ歌を中つちあたると御覧にての
ち肖柏をめぐりて発句肖柏

夜よをたてえんをやいくよ秋は月

御腕御製

庭にくとらぬ玉一さ乃露

案どるよ発句帳より禁裏御夢想此事
ありて宮中乃御會に系傳一うバ勅よ
てつかよまのり傳九月十三夜よとあひ

て委一からず

同第二よ曰逍遙院殿記云五月朔日光
鎮とりふもの連歌興行をべたう一頻
よ中傳り一うバ光明院よて一度あつよ
一に

濱松は名よやろへ一ほとくたを 肖柏

みトウ夜惜をうら波の夢 實隆

さご一さを光りよ月を秋をちて 宗硯

已上

大和繪圖笈五よ曰久米寺寶塔真柱ノ銘

月ツカシテ九ニ中岸ニ閑一居タレヲカマツ

露シラレテ五ニ迷躰ニ弘一身ヒトリヒロマズ

法ヒトリ一レ不レ隨テ一タクニヒカリヲマス

道ヒトリ一レ不レ時ハヒヨラ節ヒトヲマツ

迷躰ニ作ニ幽苔ニ弘ニ作レ孤ニといニる

東鑑笈四源頼朝答蒲冠者狀よ曰十一

月十四日の御文正月六日到来今日従

是脚力を立んとしゆつる程よは脚力

到来作をされたる旨委承の畢筑紫此

事なごうあるがらんとこそ思ふ

事よてゆへ物さへがからずして能く

閑よ沙汰し給ふべし構てく國乃者

たによくまればすてたもすべし當時
も國の者乃んを破らぬ様あるこそ吉
事よてあらんぞれ又八嶋よたもし
すにややけ美よ二位殿女房達など少
もあやまり何しさまなる事なくてむ
うつとまやさせたまふべしかくとだ
よも披露せらむ二位殿などの大やけ
をぐしまいらせて先さまよたもする

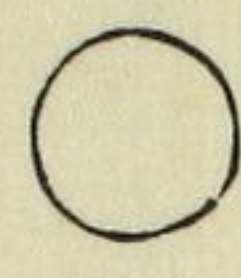
事もあるらん大方の帝王の御事今よ
えドめぬ事をれども本曾の山の宮鳥
羽の四宮討まいらせて冥加つきて失
よと平家又三條高倉の宮を討ちりて
うるうよらせんとする事をれよとされば
能く志たて免て敵をもらさずして閑
よ可被沙汰也内府の極て憶病よたも
せる人なれば自害などいよもせられ

ト生捕よごりて京へぐりて上らるべ
しさて世の末もいひ傳へてあらば
今そこし吉事なるを返すくけ大やけ
の御事覚え来る事なりいりもく
して事なきをうらよ沙汰せさせ給ふべ
し大勢たよもいゆをよきく作舎ら
れゆべし穴賢くくさてち構てく筑
紫れ者どもよとにくまれぬるよふ

るまわせ給ふべし敵よたくなるとなる
と人の中さんよ付て敵をあなげらせ
給ふ事あるべうらず侍ども乃事是よ
よを彼によりさしやさなごして人に
えうとまれ給ふべからず坂東よも其
後別事もなき少と騒ぎ事ゆとせず委
け雑色よ作舎ゆぬ恐くと云云
案どるよかく戦國れ世の中にて武勇

をふるらん事とん乃ましくなる時とさ
へ國中れものによくまれぬ處うにと
れ教訓と誠とありがた大將の明鑑
なることに目出度治せれとさよまれ
何ふてまいよく國中乃ものによく
まれぬ處うれん持第一の修行ととをべ
しいちんや出家沙門れ身乃上る柔和
りして慈悲をもちとさる境界なればあ

さなゆふなにけ大將の教訓をふよか
あてわさるべうらず何事よもけれと
むさをものて急得ととをる



南畝莠言上よ曰下学集云江南所無梅
一名也トナリ按どるに須磨寺よ若木れ櫻制
札とて紙よ書しものあり其文よ云須
磨寺櫻此華江南所無也一枝於折盜之

通言類聚
三十一
輩者任天永紅葉之例一伐一_ニ枝者可剪_ニ一指_ニ壽永三年二月日とありわれは制札の文を疑ふ事久し江南所無の梅の名なるを櫻とせし事いふこと思ひしが文化元年七月此ころ西遊しては寺に入てま乃あつるに書をえしに須磨寺の櫻とかけり櫻は字紙のやぶれありてさざうにみえわらず源氏須磨巻よ

若本れさくらさねを免てといつるに附會して光源氏を源九郎とあやまれりよや櫻に江南所無の名ある事いまだゆも及ばず戯る梅一とて栽植て此華泰山府君なるともいたまはしと利口せしがけ寺は門内よ若本乃櫻と標して欄をもてかこひ一むら竹のあげれるを源氏やしと稱し櫻壽院とい

つる坊もあれば古にいたゆる成事不
説の類なるをいへど口をとちてやこぬ
そりくち圃西惟中が續無名抄をえられ
べい事を論じてまゝに梅に制札を櫻乃
名木あれば取合て須磨寺の什物とい
たるなるべしといつるまといつり

和漢文操第四曰花制札 源義經
此花江南所務也一枝於折盜之輩者任

天永紅葉之例伐一枝者可前剪一指者也

壽永三年二月日 評云い制札をせく

に書つてへて或も須磨寺に若木、櫻を
まゝと兵庫、名所記に出せしが其記に
江南、所無也とありて所無の字義通
が、或も弘安禮節にも難波之別當
源判官殿へ花制札の傳ひを辨慶に彼作
付のこれ 江南、梅を折一枝者可處嚴

科^ニ者也とお徳ゆへバ義經御覽ありて
花を折者心なくして不折あり強き
文言とて則御直一のよし 江南梅花
折^ニ一枝^ヲ可^レ切^ル一指^ヲ者也云云今思へば乱
を此紛れ難波の制札を須磨寺に指
傳しや梅に江南に便あればりりれ
後勘あるべき也或も天永紅葉之例も
其代よけ制の沙汰ありや尚又後勘あ

るべき也といつり

甲陽軍鑑第四曰関東上杉管領はな
の制札よけさくらを一枝も朽りと
るゆりてあはる八間流罪死罪に作付
らるべきものなりよめて如件ときて
られたるなるを扱又信玄公甲府穴山小
路真立寺と中を法花でらよ紅梅に甲
斐一國のことと中をに及むず近國よ

もさのみたなくなりさるにつた右れ
真立寺よる花乃制札を中徳よつさ則
禁制の札よは花一枝一葉きりとりふ
ともたたむる輩これあるにたぬて
へぞんかううう庵うた例よまかせ中
付べきものなり如件とあそむさる子
細き花とりふものもきこよのつねれ
せいたうらうぜきにちがひ花乃主こ

れをたしむるまゝらん春れき免おと
るもえぬものた免りけれもやさし
た情あるに流ざい死ざいもあまるな
るとれ養よてゆといつり

又莠言下よ曰北村季吟翁れ墓ハ池の
端カヤ茅町正慶寺よあり昔年ゆきてえし
事阿里其墓に

花もさのほろたさをもまちらいでつ

これ後乃をわらふことなる

再昌院法印季吟先生 宝永二乙酉年

六月十五日八十二歳卒とほりつけを

りといつり

又文操第四乙曰遺庄五郎書 楠正成

け度隼人差下事非別美我等寂期近い

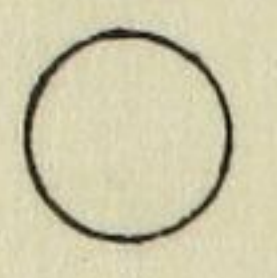
覚の願貴殿成長之器量又居度のゆは

義之所重又難適の休勅学無懈急成長

之後我等の中を被察の傳言 尚くけ

毫緒を公よりお交り足は祖より恙ふ

るの承るかこみと贈之ゆといつり



南都佛足石此碑乙和歌乙一首あり其

中の第二首に曰弥蘓知阿麻利布多都

乃加多知夜蘓久佐等曾太礼留比止乃

布美志阿止く巳呂 麻礼尔母阿留可毛

といつり正面むむ墨付のところ豎五尺餘横一尺五寸余なり拾遺集第二十に曰光明皇后山階寺にあり佛跡よかきつけたまひりるみそぢあまりふたりの姿そなへきるむろいれひと乃ふめるあどぞこれといつり遠州牛鼻に巖岨に和歌よ曰
ををうー乃をな見車に

法のみちひうれてくよ廻り
きよろりといつり弘法大師御真蹟
と中傳あるなる正面むり墨付れここ
ろ豎四尺五寸余横一尺四寸余なり
上州多胡郡に碑よ曰
弁官符上野國片岡郡緑野郡甘良郡并
三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅
四年三月九日甲寅宣元中弁正五位下

多治比真人。太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊。といつり六行八十字正面むら墨付乃ところ豎四尺一寸余横一尺八寸余之和州粟原寺此塔乃露盤の記文よ曰
寺壹院四至
限東竹原谷東岑限南大岑
限榎村谷西岑限北忍坂川
此粟原寺者仲臣朝臣大嶋惶惶誓願奉

爲大倭國淨美原宮治天下天皇時。日並御宇東宮敬造伽藍之尔故比賣朝臣額田以甲午年始至於和銅八年合廿二年中敬造伽藍而作金堂仍造釋迦丈六尊像和銅八年四月敬以進上於三重寶塔七科鑪盤矣
仰願藉此功德
皇太子神靈速證無上菩提果

願七世先靈共登彼岸

願大嶋大夫必得佛果

願及含識俱成正覺

といつり正面をむき墨付れところ豎一尺六寸余横一尺九寸余なり

奥州宮城郡に壺の碑あり曰

多賀城

去京一千五百里

去蝦夷國界一百七十里

去常陸國界四百十二里

去下野國界二百七十四里

去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍。從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平。宝字六年歲次壬寅參議東海東山節度使。從四位上仁部省郷兼按察使鎮守將軍藤原。惠美朝臣朝獨修造

也。天平寶字六年十二月一日

といつり正面むらと墨付れところ豎四

尺五寸余横二尺六寸余なり

右五種も予が所持せるところに摺物

なるを命終のちらといひこれに散在せん

依て今爰よりしをくものなり群書

一覽第二擁書漫筆第一等をえ合せて

そのおもむきをあらるるなり

○ 黨援之衆無競大義

群迷之中無辨正論

晋宋齊梁唐代間

高僧求法離長安

太人成百歸無十

後者安知前者難

路遠碧天唯冷結

通哥之詩別集

砂河遮日力疲彈
後賢如未諳斯旨
徃徃將經容易看
何乃萬里來可非銜其才
增學助玄機土人如子稀
可曾婦禮婆等麻良奴毛乃乎登之等伊
非互故登思波伊多久於比曾之尔家流
遠之互流也奈尔波乃美都尔夜久之

保乃可良久母和禮波於比尔家流可奈
於比良久乃許年等之理世婆可登佐
之互奈之等故多敝互安波左良麻志平
佐可左末尔杼之毛由可奈年登里母
安倍受須久留與波悲也登母尔可敝流
杼等里杼無流毛乃尔之安良禰婆等
之都伎平安波禮安奈尔杼須具志都留
可奈等等米安敝受無倍毛等之登波

通哥之詩別集

七

伊波禮家里志可毛都禮奈久須具留與
波悲可 加賀美夜麻伊佐多知與利互
美天由可牟等之敵奴流美波於比也之
奴流杼

後徳大寺左大臣

時多雲ぬま名をもあくるか那

從三位頼政

弓 ころも 月乃りるに任せて

前右近大將頼朝

我ひとりふれ軍ま名取川

平景時

君もろととにうちわのりせん

源義家朝臣

衣乃きてるほころひよあり

安倍貞任

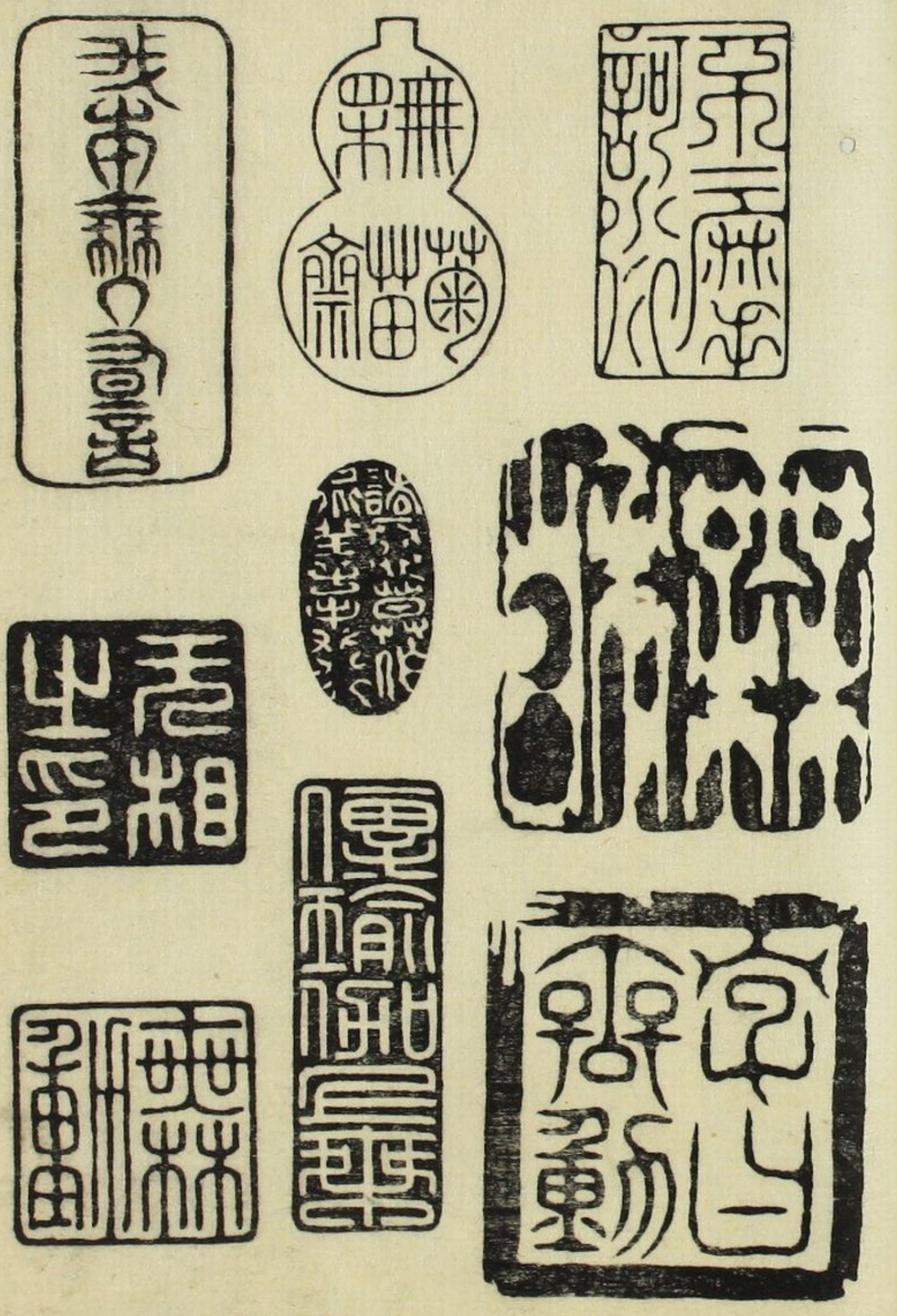
年を經いいとれ乱乃るさるに

已上

け五牋と能書五人をえらひてかく
 老唐紙一葉の石摺とせむやとちのふ
 ちのふと第一牋と西域記に載まるところ
 此如意論師乃遺誠のことむなり第二
 牋と西域傳とあるところ此義淨三藏
 乃開經此頌なり第三牋と性靈集の序
 此のせまるところ此馬摠が離合乃詩

なり第四牋と隱逸傳とのせまるところ
 此七隻乃和歌なり第五牋と菟玖波
 集に載まるところ此雜連歌なり第六
 第五と能筆を求免しうども其餘とい
 まざると免えず予も老きを鑄石成就
 ころもとなふにがえらればまの爰
 と寫置ものなり
 又予が所おせるところ此石下と古わ

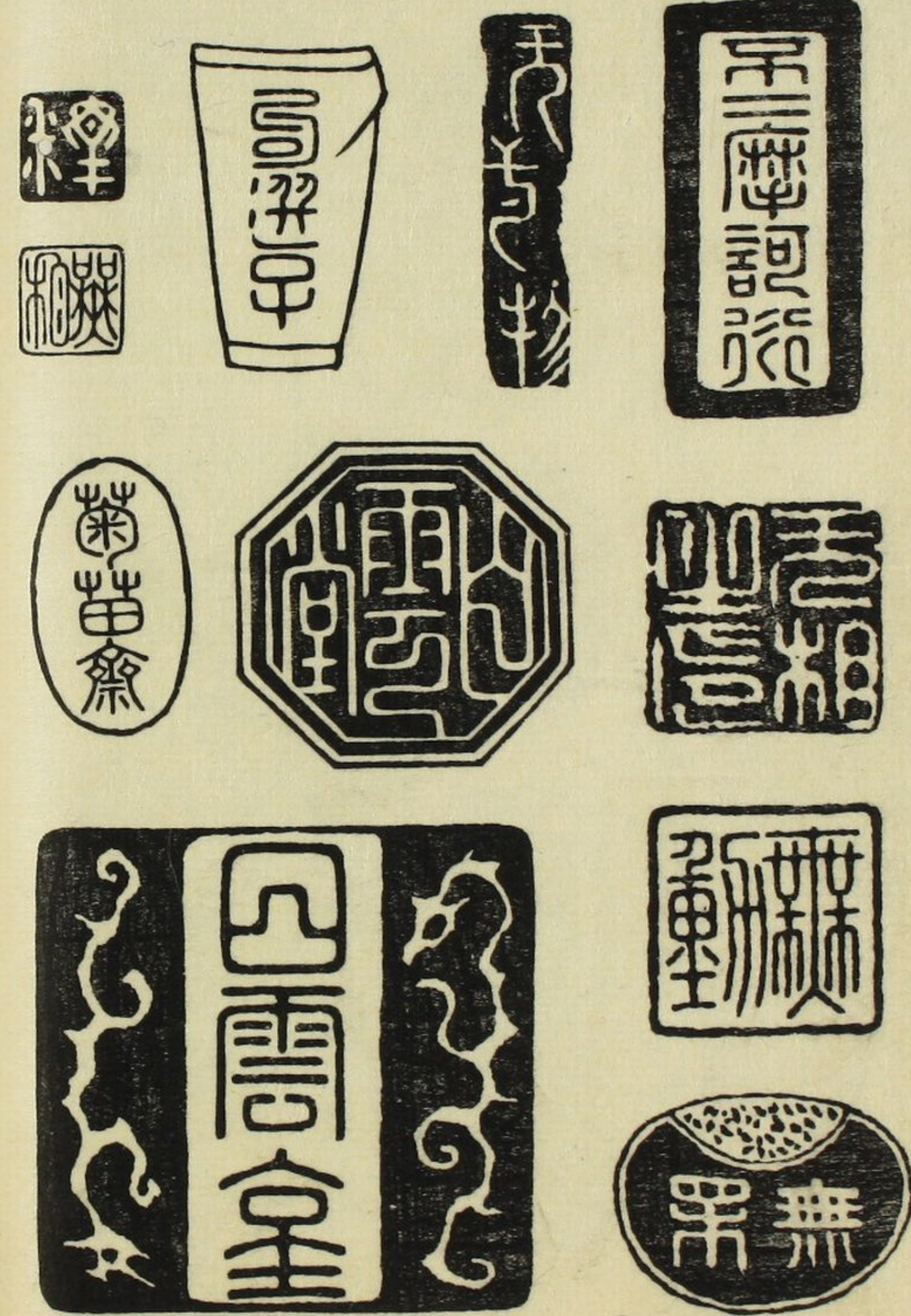
するもの石よて今時を無類乃もの四つ
 五つあり彫刻も名人の作も何れも亦さ
 やどにハなき物もあり肉壺もめづら
 したりの何れも銅もろれあり象牙水
 晶角石木等もあまは等乃物玉此緒
 乃たえまのちまのりれの人此手に
 ねちなんこととも志らずよめてみなあ
 つ免て爰よりをくものなり



連及茶類別集



連及茶類別集



連及茶類別集

○
 雑談集下巻曰或師の云利休此茶乃
 湯よあひて事を好むともがらその折
 み此道具どもを是も古し是も新し
 などく目をもちりてほ免あひあれば利
 休散く不興よて新古乃目利とあき人
 にこそ何れ道を好むともがらいきと
 へ欠摺鉢なりとも時よよろしく茶乃

湯よ用ゆると用ひられざるものさう
 ひを辨ワキまへて物數寄をほむ處たなるを
 と何りしとや誹諧もさのごとく句
 と道具なるを點とあき人なり誹諧過て
 の點なれば其席にすゞはるて是も長
 是も丸珍重なぞく點よあてく目利せ
 らるべきいふ委ぬまどくや打越乃六
 うしを所う席れあがりたる時又宜し

く付流しをらばたとへ無點の句なるも
とも是用なり點者乃んをうねて句ご
とにあらぬ工とを免ぐらし人れ前句
をばひあひなどせんも無下に口惜き
をさらたなり用無用の境新古乃分別
ふざしを高く守らば自然の風流あら
ちれて幽玄乃一句もいうで思ひちぎ
しぬべきやさればい茶中折目乃ま

れ茶中なれば作を用ひざるも時のよ
ろしたよや阿ら茶

為氷折目のましれ茶中哉 普船
ことさら今朝も耳そつ免した 其角

已上

案むるよ是等れ朽もむらゝ連歌の席
にても常く意得あるべき事なり
又俳諧十論衆議よ日附録に漢書賛聞

漢書賛聞

張良之智勇以爲貌魁梧倚偉キョウ反若ニ婦人
女子とありられ仁勇を内よつみて
張良がふるるとまこの遠なりむうー山
崎宗鑑を攝政公笑ひたまひて

宗鑑が姿をえればがさのむさ
と宣ーもふるるとまこれ遠なる芭蕉翁
乃攝州山崎なる其宗鑑の廟に詣て
あらしがさの姿にがまん杜若

とありーのそのがさのむさこれあらしが
まをさの姿なるべーとつり

案むるよかまら姿をえて人を笑ふを
りらざる事と殘編の中に載するここ
ろれ今物語よりふがごとく一亦黒牛安
勝馬頰道風猿面太閤等れごときをの
く外相と内心と雲泥乃遠ひしめて
その美名末代まで残れり鬼もも角に

も人をあなごることなかるる

○
貝原篤信が云老人の保養も常は元氣
を杞一みてへらをも慮うらず氣息を靜
ししてあらくを慮からず言語をゆる
やうにしてはやくとべうらず起居行
歩をもあづうにを慮一せの中此人乃
ありさまわがくろよかなはずとも

凡人なればさこそあら免とあひて人
乃過惡をちご免ゆるしてとがむ慮か
らず又わが身不幸しして福うとく人
われに對して横逆なるも浮せれなら
ひかくこそあら免と朽もひ天命をや
きんどてうきふべうらず常に樂一み
て日を送る慮一人をうらというるを身
をうれひなき事してんをうる一免樂一

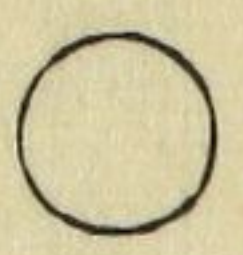
まづしてはうなく年月をとりだをん事
にむるに云

案どるに芭蕉と俳諧を老後の樂しみ
といつり愚老と連歌を老後此樂しと
とせると人懐のまぢくなるものよて
樂しみもさまぐなる一様とせむ
應うらず昔年先達れものかこまに
連歌師とれんがせぬもの寄合て

とりふるは童子付て

かみれらるありまも乃らるるなり

已上



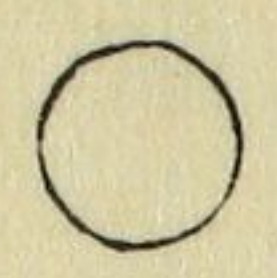
利運談笈四に曰堪忍之利運との貴賤
一同堪忍の二字を第一に身にもたざ
れば一生利運閑運を遂ることあると
ず既に補正成千劔破に籠城せし時堪

忍を城郭とす。油断を大敵とす。書
して士卒を誠イシ免ミらるとぞされば古へ
よりい二字を守りて天下をたさ免子
孫繁榮ならざるはなす。貴人を勿論卑
賤れものといへども人みなそれく
乃をくなくんばあるをうらず其く
ろざしを成就せんときるのみちたこへ
現然する耻辱非義非道を先より仕向シケ

らるくともそれをよる程はあひくら
いならぬ所までも堪忍を以て無難は
ことをさす。負ミテてやるが中要の利運
なりいとゆる無理が通トホらば道理か
よれにて取あわぬが。その外小事
を顧カウミず勉ツム夕ツキい二字をよく守りその功
がつゆれば自然と立身出世もはやく
わが身乃利運とあるべし。無理はこら

ゆると思えず是がつと免修行と朽も
 へば後くも常にあするぞうー古句に
 氣にいらぬ風もあらふよ柳う那
 け句れろくろ堪忍よよく叶へる草木
 あらね風にさうらへば必ず枝葉を吹
 ちるしなうりろくろを柳のごとく柔和
 にもちて免も角も氣をなぐくーて時
 節をまへねば大利運を得ることかこ

一堪忍れ二字をよく慎と守りー人も
 異國にてハ韓信なり本朝よても頼朝
 なまといつり



閑田耕筆第ニよ曰尚齒會れ名高きハ
 樂天の會本朝にて清輔朝臣乃會なり
 去りれども其壽數よたきてハきーと
 ともよきならずめがらーたハ正徳五年

江戸乃人生嶋幽軒八旬此賀に招き
 人との齡なり志賀瑞翁も百八十七歳
 小森閑齋も百三十六歳古結宗軒も百
 八歳石寺權左衛門も九十七歳下條七
 兵衛も九十二歳茶人一雲も九十一歳
 岡本半兵衛も八十三歳以上七老なり
 百歳已下といへども精神實ならでハ
 會はれもむきぐさたをさだめてツラキ鑠キ

の老人なるべし右乃うち志賀瑞翁も
 人よく安まればれれ世二三此時ハ
 翁乃三十三回もあられもとても向の
 歌を勧進する人ありといつり
 案どるも予ダあるところ此人に今存
 命よて長壽なるも東海道ほどやれ
 郷のわづりも祐尊上人とてこそ一
 百二十三にたるもたる加持門の老僧あり

本年中手蹟を所望しおれべく
なうくによむ云の案はなかりあり
富士乃あらゆきふしは志ら香
右御製なりとかきてたくられまを
も今時より免づらした長壽なり
又閑田次筆第四は曰京三條繩手は伊
勢屋といふ元結を商ふもの家乃造
作せしむる病者たかく出来しうバト

者をたのみて筮させしにこれの逆木
柱は崇タカなるもの時よりある人吾後ふ
るとして

伊勢屋といふ元ゆい一の家なれを
さか木はしらもなにうくるし
そのつらしに不思議なこれよりこと
なく成しとぞ高賣の元結に榊までを
取あせし面白し又ちがまにて

東海道志

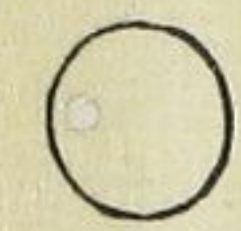
八

つねありてうらまをとり喰ひられバ
たのが名れ作りを喰ふ狐う那
そのふ糸句を書て畠は立ーうバ其夜
よまをたらざりーとぞといつり

案むるは狐が出てなまむび我喰ふ時に

これ茄子とつねねが喰ふこと黏ネバが註進

と書て其畠は立ればたゞらざるとらふ
俗談と同ドころあり



寛政れと名の方寒症をわがらひーこ
ろ大和のこーそのふ野は服部宗賢と
て名醫あり療治をたのみにまかす信
じて彼地は逗留乃時そのわさるれ山
乃うへに益田此池の碑乃臺石ありと
きて友どち四五人さそひ何れ案内
者を登こひて其山へのつらてるれば

誠と目をたごろうを程乃大石なりた
ほよそ縦と二丈五六尺をうら横と一
丈四五尺ばかりにして山の片さが
なる所はあり前北方の地より五六尺
をうらも出まう後乃方の地より出ま
るところ二丈ばかりもあるらんう
一つ石よりてうへ乃平れところよ三
尺をうらの方穴二つあり深さともぬ水

ままりて底みえず左右乃端をなく
に溝ありてふくさ一尺ばかりも
なる臺石なればよや何方にも文字を
みえずうしろれうら一面は莓む
て希代乃ものなり臺石をゆいて
に其上は立まする石碑が今れをに
ならバ日本第一乃いふとならま
もの筑鳥等惜哉そのかともらに草刈

わらひニ三人みえたるゆへ戯よられ
も何とりふ石なるぞやと問ひられば
これなん船石と申をなりと答へあつと
石乃うさち船よ似られむなるを一其
石の上に四五人ゑ居してわれいひな
どくひ酒ものゝて後よ帰るさに及ん
て友どちれ中よりまをだのいけてふ
六文字を五七五の沓冠よをさて時乃

察せよとひひらればうく

真字みえずまをいく秋れ石乃こけ

とつわふまうつりあを好古の人を尋ね
て見るべしあま面白き所なり若し尋ん
にも益田乃池此碑の臺石など問ふ
ていあれがさしきく船石のある山を
りげこそ尋ねられはいうなる樵夫わ
らん處もよくあまてをゆるなり奥

州つがのいーぶとをるんは壺此碑な
どくぬねてとそのわさる乃山賤市女
等とあらざるなりきとたていー此何
るところをいひてぞやと問ひられバ
よくあらて答ふるがごとし

又さりのころ大唐青龍寺慧果和尚此
碑を初開講よせしと記聴聞の中よる
ある人云弘法大師乃御名も末代まで

和漢に高し新唐書よもこれありや予
云られあり東夷傳にみえきり舊唐書
よも佛迹ありと載せれども新唐書に
ひみなあがりよとてくのせず其書此中
よけづりをもてられずして載をかれた
る事と誠よわが大師此美名なり新舊
二唐書にのせてあれば未まで本朝
乃面目なりあふいでまふとふる志

かるを年譜和讃また舊唐書のと出
せしといまご詳くならず大師此御名
と末代まで高しとりふろろ城
いく春を修ることも御名の高野山

已上

○
享和二年此ころ初瀬山乃文殊院よき
みゆり一時五ふつごあひ免きくるむの

木を求めてそれを題よして五木をよ
し入し寮向を案じて二句

古枝さくばなのみぎさとい垣もなす
まがさくいさだりれむ乃ひと木哉
とつかふまつまればある人のいた
くむろー筑前此福岡よて六州六巻を
よみ入し寮向をぬりーうごも其時か
さごと免ざれば今もわきれてさしー

建久六年癸卯集

甲斐もな〜兔も角にと筆も免よか
たつあをうざれば老後の樂〜こにも
ならずと云云是よよめて又六巻六州
をよみ入〜案句を案ドてうく

岨づいひ。志なく。と。ふ。や。は。な。れ。宿
む。さ。た。〜。さ。あ。ね。〜。と。を。〜。湖。乃。う。み

已上



文化庚午れ春世六年ま〜あれ〜本山
を出てゑがなくあけまの延命寺へ移
轉せ〜ゆるひろたむさ〜の〜月をえ
をよとあひな〜て月〜朔日よ〜晦日
まで十とせあまり乃程〜ろに〜あ
て久堅れそのちれわ〜る〜て雲霧れな
〜時ををこまら〜ず〜て極るに浦和と
西の方へ三國一乃富士山をう〜る〜に

みえわさるまで月がーらの月をえらるよ
よろー文政戊寅の冬東都乃金剛宝阜
へ轉住してそのところれ風景をえらる
に油嶋とひんがー乃方へあまさがる
ひなをうたるにみえわさるまで月をえ
の月をえらるによろー志うへあれども
朔日れ夕月と晦日乃曉の月とみえ
ーことなー二日と廿九日とれ月をな

が免ー祭るる八月二日れ夕月をえて
むさー野と二日も月乃ひうり哉
九月廿九日つごもをにーて曉と月れ
みえられバ

むさー野と出ある月れかどるる那
又大の月れ廿九日と予が誕生日なれ
バ曉起して鎮守稻荷大明神をまつり
院内ものこらず院外乃童子等もあま

た呼河の免て餅さあなんどのいさひ
事ととくく此例なるよ今年とと
わけ前夜より天氣よろしく夜も隈な
くちれてちまばくり此雲霧もなく寅
四の時もうちをだて卯一つととに
なるらんうーと思ふころひんぐー此
方よ出るる月の形乃まん丸にみえて
とー此光りのいと清ううよ細さをが

たハ三日月に似きりなる西風をそよ
くと艸木乃うへよわたりてその氣
色のふむうをなくして夢に面志ろふ
たがえらればととあえずうく
みうのさの姿もかくや今朝此月
又晦日と朔日とよと月のみえざるんを
つごもれついまの月乃新もたす
又文月晦日と自然齋の正忌なりある

に今年ハ廿九日つごもるをなれを暁よ
たきてひんぐー此方をえればあまさ
がるひな乃地をはなれて出たる月れ
みやこのをー乃ところかきうにひか
るあらはれてその光りいさだよく清
りればふもきをみわこをなにとおを
もあろくにわがえ侍りてかく

みそうなる月の光りれあきもな一

とつかふまのりてながえたるうち
ひなとあらえむいさだよくあざやう
なる月のひうりも少一をうとくなま
て二日れゆふ月のごとくなれどもひ
かま乃上下遠ふなり程ぬく朝日れ出
りれば亦そのうとさひうりもみえが
たくなるにあり

巴上

○
 辛巳れ秋南呂の中ごろ塙惣檢校より
 寛永年中乃連歌三百韻此懷紙を托く
 られ来るを予が連歌を好んで教ふゆへ
 なるべしそのころざし乃深切なる
 ことを感ドてをのく一頌づを爰
 二寫置ものなり

寛永九年三月廿九日

於高松様

何船

散跡も古もぬ花乃も葉哉 昌俔
 名残閑もた春ぬ此庭 水
 露乃色も霞む芭も蝶乃ねて 嗣良
 そのふれ光漸き書ぬめり 玄的
 吳竹の歌涼しき風此春 昌程
 河舟さして初岸傳ひ 春重
 月影もううへ浪の志らむ夜よ 元知

霜冷——く 千鳥啼こゑ 久園
 残らすもうら 枯淡る 浅茅原 寅滋
 とそ野よつく 乃香なり 仙閑
 狩人やまの 書ぬより 帰るら— 可休
 香茅に 吹て あら— 吹山 執筆

已上

寛永十四年卯月十五日

於 二條攝政様 山何

せよさうぬ 初音を記なす時鳥 藤
 花をちもな乃 香に白ふ庭 昌倪
 約簾捲つら 乃風神振て 昌通
 つゆり— 朝れ香乃 乃香なり 玄陣
 種ひく 枕乃 山や近うらん 玄的
 又乃夜も乃 旅ねいさと記 雅陣
 舟とめ— 湊れ月の 影沈て 實任
 浦われ 唇乃 香さたう之 和仲

秀拂夕汐風乃吹をさひ 養山
 時ぬし露の白を松に兼也
 本く乃色は薄き光れうらら
 今ねも閑き遠乃やましく 俊臣
 雲は皆消つくしたるを晴て 道芳
 分行方やむさし原 頼房
 執筆

已上

寛永九年卯月十七日 唐何

摘はせよ一本なる白ひり那 昌俔
 宿をつくれすよ郭云 吉親
 夏衣ほさん日毎は露落て 玄的
 白雲まよふ山乃香き 青海
 種のをひりたくる夜も明残る 吉親
 め見てをさ野へのうり 昌俔
 露は霜と月にや結ひうへぬらん 青海
 草隠つ細き虫れ 玄的

通哥交言別集

九十五

已上

又同年此冬霜月廿二日乃夜の戌此刻
 をうりよる油嶋妻乞稻荷の邊より出
 火一南風はぎく吹て天満宮社頭此
 立木ならびよ根生密院東南乃椎志ら
 う一此常盤木までことぐく魚類焼一
 て枝葉のこまなくさうりたろ一眼みか
 る物ちりばくもなをたぢりふ一志を

を此廿九日乃曉の横雲たなびさ一ひん
 ぐ一乃をよかをうなる月此ひかまの
 いとたよらうにみえられバニ白

横雲此をみまに月乃こりりう那
 あうつたのひかまもさむ一東方
 又あるところれば一ら乃かけものよ

心 小 則 百 物 皆 病

と何れも主人よりられよ和句を所をせ

られたるゆへにいなひごとくて
 天地乃中よまゐるく身をもちて
 かゝうにつくふまのまをいそぢ
 よろこつてかちんを出せり
 又水無月れついたちよ日そくたれば
 日れ乾のかられむとけぬ氷室うぢ
 とつかふまのまをいそぢ
 と一も六月よ日そくあり十二月に月

そくちを世の中れゆこうならんこと
 見えたるといつり予が云志かるる
 らず蝕もる變異の蝕あり常度れ蝕
 常度乃蝕も不祥なるものよあら
 ド曆象編主委しく論むるがごとく
 又むう一三月廿一日に高野山へ系
 してそれより龍神の温泉よ朽もむ
 一と記同宿れ老人三宝をなりとて郭

公乃屬うなるをををみゑにうさしを
 出して榮白紙所をせしゆへは繪もた
 れが筆なりやと問ひられバ時代も志
 うとあらうざれども往古高野山よて三
 宝をえせし大徳尊者木食上人乃
 筆なりと中傳めるなること答ふ予ハ三
 宝をとりふとるも形をえしことも
 を受しこともなれども老人が中を

にまかせて

みいの名を一喜よふこもり
 とつかふまのまてあるへられバ老人
 よろこたれもるが翌日になりて蜜酒
 とりふものをたくられまり龍神わ
 りの家くに蜜蜂を飼ふてをく所なり
 亦疱瘡も聖武天皇れ御宇よわつりて
 千年あまりになれどもそれさへいま

だ流行せざる程乃遠鄙れ山中なり亦
三宝とりふも佛法僧なり平康頼が三
宝ハ諸宝の最上なりとて宝物集とりふ
書を著しきると初んれ人乃た免るもよ
ろしき集なり

又過より比慶安太平記をえるに正雪
が武者修行の時ひくとりふもどもの
をうちと免きるとある文処よて

日くに名れやまれも高し秋の夜
とつりふまのりてそのうち備中乃辰
が東遊雜記をるれば蝦夷地は熊と
いふ獸あり四足も猿乃ごとし其か
ち大なるは一丈あまり小なるも八九
尺むかりにて人馬をとり喰ふ馬をと
るも馬乃首尾をぬれ手に搏んで背
にうちかち立て走ること人の走るよ

まもはをー實はたそろーき獸なりと
うあれども蝦夷乃獵師もその獸を毒
箭をゆめて射と免皮をとら其肉をく
らふ毒箭その獸はあつれば一足も走
ること叶えず即時に倒れてくるひ死
を的當乃妙毒なり獵師此外も毒方
の調合をあるものなりー蝦夷にてひ
ぐまともよぶ松前にてまねぐまとやと

なること云云案むるは正雪がうちと免

しものも蝦夷れひぐまなるべー名も
所よものて遠ふものなり

又そのうろと麥秋れまゑのわさ上毛州
箕輪乃古城石上寺はたぬて俳諧師う
ち集ひて月並の會何れもあるころをれ
れよも夏乃月此題にて祭句ひとのせ
よとあながちにまゝ免られくる時お

ふー庫裏の庭前よて人乃赤髭になり
て馬城阿らひもるをえて

むま洗ふ人の髭やをの乃月
とあつれば俳諧此宗匠昔廬とりよも
の一段とほ免られきり予がたもへら
く察句此秀逸なるもあらざるを
俳諧乃仲間へ誘引せんた免の方便説
ならんと察してそのうち會席ごと

にまゝ免られしうごも一句とせざる
なり初ふ乃人きよろづいけ急得ある
庵き事なり

又志をその中ごろ木曾此あぢまのよ
ていとぢう雪ふるるゆへ其日とこ
乃所よとまりられれば同行の中此俳諧
師云木曾の棧カキより芭蕉翁此察句に
かけたりや命をうらむ苦のかけら

といふ秀逸ありて名高き所なり連歌
 乃餐句一つ所をとりければとてあえず
 かちばしを添りうねまゝの深きう那
 とつうふまのまきれば誹諧師云われ
 らも連歌をさせざれどもむうも連
 俳歌仙行といふものあれば今もその
 んよて腋れををつうまのらんとて
 本る川たろし寒たるとご唇

と志まゝのりはまで日くにつうま
 つまし餐句もあれども爰より載ずま
 け二句のま出しをくものなり
 又疇昔山中の隠者より五色は朝顔を
 まとていまご蒼も出ざるをたくられ
 まり近年あさがほよのかごとくのい
 ろ志なわうれてたふよそ七十種むり
 まもありなんご中を人あれば五色は

槿も其中にもあるべし青赤白乃三色
ハ免づらしからず黒黄二色も是追え
ざる葬なればをしなひたてて花をみ
むやと欲して石臺よりへをたてかく
くろよりにさく物良乃花もが車

已上

又雜笈輕口此云の事も無益乃ことな
がら少く書載るものなり予昔年志もふ

されこがねぐもら乃野飼の駒れこま
どろを見物よまりし時あがまばしを
わさらずしてそし乃そをによこわさ
し此あねあるゆへあねよのまて渡守
にむらひてけわさしをあまりは橋を
ちかくしてあるは由緒よてもある事
やと問ひしうべ渡守が答ていとくけ
所もむむかしよるを古歌ありて人みな

あるるところなり其歌に云

あがまむーわがつまはーとかくうらよ

わさーのたまへ乃そばををたなれぬ

といつりわさーのをわさあやとせ

ーなるむうーれみやこゑのたもかぢ

もあひやられていとたも志ろーお節

そら成かむまぐねれかどくうちつれ

てわさうられば船中にて

橋とみねをたなれぬ中やわさるる層

と口をさびよちきれば後守もさくろ

えあるものにや再吟ーて矢立を出ー

書み免らるるなり

又壬午水無月五日江戸日本橋かぢら

ちるてわさうぞ免に奥州一戸村よ五

夫婦そろめて長壽なるものある山崎

清左衛門とりよけ夫婦れ年男百四十

五歳女と百三十五歳其悴清藏夫婦
の年男百十二歳女と百九歳其孫清
之進夫婦乃年男九十三歳女ふさ八十
九歳其曾孫清之助夫婦乃年男七十三
歳女はな六十八歳其玄孫清右衛門夫
婦の年男四十三歳女さゆ三十九歳な
まかくれごころ乃五夫婦のうらたど
免れ二夫婦系府一てわさるぞ免あり

一守極行よりてよみうらまあり一ゆ
求めゆとて眷屬ども物倍をせいな
まのまりに孫お事と覚えて筆をとら
そのおもむきに家よ書ぬ免をくもの
なり虚う實う更よぬぬ一亦むう一
ある人の云

遠い處にてちかい事う那
とりふるよ

連歌茶談列集

百六

もさばいてからくわきくる日本橋
又ある人乃云

たーや三八は質も流れる
とりふるに

かと川は九把をく苗が二把みえぬ
又ある人れ云

せよかねさるものせあられづるもよー
あ乃よあられを又ねるもよー

かー

せにうねのうをせあられどかーもどす
ゆえ乃よあられどさふもねられず

又ある人の云

せれ中乃なさけ志らずれ義理志らず
はぢも志らねべ金とちとあふる

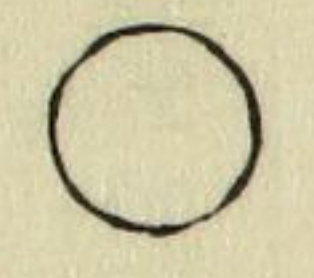
うー

せれ中乃義理もなさけもかね次第

金ぐなもれればもぢをかくなり
案どるよい四首の歌前乃二首と後れ
二首とる作まれたうーみも姿情のた
もむまると基にて中せば二目も三目も
ちがふあるるるー亦たーにうも三八よ
二九質を七にとるをーて苗れ流れる
事よ仕立まりぬも畢ぬをるをくも質
の縁語なれば面志ろる付様なり

又ある人乃云六歳れ童女つゆが辞を
まて志むーなるよのなかれいと中どし
むとせ乃ゆめのなごりたーさに
つゆほどろはなのさうりやちごんえら

已上



群書一覽第六雜書部に曰或書よ云櫻
井基佐ハ洛陽れ人剃髪して永仙と号

と連歌をよくせり宗祇宗長同時乃人
なる宗祇新菟玖波集を撰せられり
は基佐れ句撰入られずこれを積りて
中あしくなりて宗祇乃句を嘲哂する
事ありまゝ落書して云

遙見筑波錢便入チル不論ゴ上手ト與ツ下手
あしくなくてのぢりかねまるにつくして山
和歌乃道よハ達者なれども

已上

沙石集算五よ曰学匠れ萬事を論議よ
心得まるること三井寺に教月房にて碩
学ありたり幼少の時より万事をまじ
へず学問乃外他事なくして論談決擇
れ道ゆるされまゐりたるが和歌の道つ
やくあらざるも弟子どもやたる

連歌及茶寮詞集
百九

わわが朝れならひ古も今も歌ふ和歌
乃道御心得なきこそ無下に覚えゆへ
とりよさて和歌の辨もいりなるもの
ぞと問へば古今此歌をかぐる

年のうちよまゑいふより一とせを

こそとやいもんことごとやいもん

といへを兩様は問きくるな御房こそれ
たるとほれまるとぞとりひくるよろけ

論議よきこえあるにこそとりひり



七嶋日記よ曰八丈嶋此人も飯をくらふ
ことなりアミタキ鹹草とりよものありて四季
れ不断草なり凡十人乃食は麥三四合
を煮まゝいらうて其中へ何れ草を
さはよたざみ入う志不を汲んで煮く
を雑水とりよ嶋人乃常れ食物なり爲

朝明神のよそたまふとりよ歌よ

我なくも仍末まわれあーたくさ

いもまゐる人乃あらんかきまへ

といつり案どるよむうー源頭基卿の

罪なふーて配所れ月をるさーと恒に

ねがられー事あいとあうかなーく是

え侍りーゆへそのころをうくなん

つみなくて嶋れ月るる夜半も一那

已上

續群書類従目録に連歌部と曰 竹林

抄 紫野十句 文安十句 宝徳十句

河越十句 熊野十句 伊豫十句

石山十句 出陣十句 至徳二年石

山百韻 宝徳三年三代集作者百韻

同年伊呂波百韻 寛正五年將軍家百

韻 長亨二年水無瀬三吟百韻 明應
三年新撰菟玖波祈念百韻 同五年本
式連歌百韻 大永元年伊勢物語詞百
韻 天文廿二年尼子晴久夢想開百韻
弘治二年永原筑前守重與與行百韻
永祿五年飯盛城百韻 元龜三年林
中務少輔與行百韻 天正二年水野監
物守隆與行百韻 同三年蜂屋兵庫助

賴隆與行百韻 同四年甲斐左近入道
宗柳與行百韻 同七年定家卿色紙開
百韻 同十年明智光秀張行百韻 一
條殿御會源氏國名百韻 應永元年後
小松院御獨吟和漢聯句 應仁二年後
花園院御獨吟百韻 延德三年後土御
門後柏原兩院御百韻 應仁元年慈照
院殿御獨吟百韻 永正二年兼載獨吟

東山先生集
卷之六
百韻

蘆名家祈禱百韻 大永八年宗長獨吟

名號百韻 賀茂社法樂宗牧獨吟名所

百韻 肖柏獨吟觀世音名號百韻 文

章連歌五十韻 真壁道無追善兼如五

十韻 細川高國朝臣六々歌仙 出陣

萬句三物 白川万句發句 老葉 萱

艸 下艸 園塵 春夢艸 壁艸 永

仙句集 荒木田守武句集 神吟山

贈從三位元就卿句集 安宅冬康句集

梵燈庵返答書 袖下集 宗祇袖下

花比まう記 馬上集 薄花櫻 白

髮集 心敬僧都庭訓 同比とる言

連珠合璧集 雨夜記 淀乃和老里

胸中抄 闇夜一燈 連歌執筆次第

已上六十六種

案どるよ續類從多一千百八十五冊に

して二千百三種あるものなりいまさ
 上木成就せずして檢校終焉志をまへ
 り法名の和学院前惣檢校心眼明光居
 士時に文政五年壬午七月初九日世壽
 七十六歳實るを去年九月十二日此遠
 初なるをゆへあひて今秋迫存命の分に
 してをくちなるを予も十余年これかこ乃
 善友よて哀愴とくならず於專惜哉



問云温古堂此百談乃序は其筋をもち
 とえゆるといつり盲人の書にえゆる
 とのめ何答云後撰集雜一蟬丸此歌乃
 とよふがたよ曰相坂の関に庵室をつく
 きてをみ侍るるよゆきかみ人をえて
 といつり是哉朽もふる
 問云蜀山人此茶談乃序は油嶋とかた

まゝに油の字如く答云北國紀行に油嶋
とこれあり群書類從に載せるなり
湯此字にりきたれども江戸砂子にの
せまゝなるなり油の字にりたてゆと假
字を付たるに北國紀行も文明年中乃書
なり續編のものなるがごとし

問云永義此真字序にも初秋熱月とか
とまゝにそのころめく答云南畝莠言

上に曰長崎よて竹の画れ贄を清乃胡
兆新が書^{カキ}しをえしに乙丑春抄四月朔
日とあり乙丑も文化二年なりけし
四月朔日まで立夏乃節なりあらざる
ゆゑに春抄と書しなるべし面白き書
ありたるをいつり是も準知と云し
問云百談茶談此をたるの年号乃下此
壺^ウと云い集に載せる壺^ウと云名此の

るものゝかゝちなりや答云をのく
名物なり百談のちうばくちとりふ茶
釜なり茶談前編れちていかにさとりふ
茶碗也後編乃ちてんもくとりふ茶
碗也續編のハ花三嶋とりふ茶碗
也殘編れちんぼく釜とりふ名器な
るに集に出せる所の纂註子科註子百
談子茶談子白雲堂れ五のハ茶入なり

正誤子句選子乃二つの香爐なり
れも一くに名れあるものなり委し
事と萬寶全書第六卷と第八卷とよ
えまり

問云前よ往く四季二百題といつり其
書ハめ何答云是と予が三十年來
ろよかち四季乃桑句集なり凡一萬
余句何と今よりのち再校して宗匠達

れえらひをこちんとあふものなり



予が富士山に四季の祭句ならびによ
しのか乃祭句も年久しくころに
かちて案どりの数をさまする祭句なり
にやよそ不二山の百四五句をう
るもあるらんう芳野は五十句あり
まといりちんうをなして二百句を

よづり其中をあふましくに百三十句か
さうして里村老人のえらひはな
て富士山三十六句吉野二十句都合五
十六句を採摘せしむるを石摺は志
をてし初ふのともうらにあきめるを
老後乃樂しよせんこたもへども多
事なればころよまかせずよめてい
紙のあるましくにまが爰は記しをくも

のちり愚老が執ふられを察と慮一

ふどれ発句春

富士のれべうとみてとを一今初れま
る志ろさい山もふどれ乃松花もな一
作繪も及むぬ富士れ雪間し南
時あらぬ雪もふどれ乃松花もな一
目よまのふどれのる松乃かとみ哉
富士乃松も雪ようがこてまもな一

ふどれ松やありさうもつられは露
四方山乃とご一う富士れ露がとみ
をまくのうを露なりふどれ乃雪

夏

五月雨よりの富士れ松をみち乃そ
ふどれの松れ雪う都乃氷室山
そびえーや富士より上に雲れ峯
夕立乃雲も及むどれ富士乃山

山高し富士乃裾野も雲れみね
ゆふもちの雲間は高し不二の山
裾野のこ暑日たれやあづけ
水無月乃秋もふるう富士乃雪
六月れひうりも雪うあづけの雪

秋

あづの松さうた雪たれやあづれ海
風まのやあづより出る富士乃雪

秋風のきいや高し不二れ山
うきあや立も及をぬあづの雪
裾野のこ秋乃気色や富士れ山
入月れ名残やそらにあづけ乃雪
富士乃雪一入高し秋のそら
月れ夜やそら聳し富士乃雪
雪高しそら鹿啼あづ乃山

冬

香られて日新まばゆー富士れき
面白ーうづこあらまを不二乃香
真白ちりみどりれきよみづのゆき
あら雲うそらに聳ー富士れ香
香あらさみづもみどり乃清を哉
ありえへてり山ほとろちすー不二乃香
みづえられば香を常を乃る松う那
四方よえて同ー姿や富士乃香

あほづまの姿や香れみづれき
ふーの香句
名ー朽み花乃盛や芳野山
何人う姿も花もふーの香ま
ゆみえへや花も一入吉野山
ちるをえよそもふーの山桜
風ふうぬ香も花なれや芳野山
ちる花乃浪も香な吉野川

連歌茶談川集

百廿

つれづれみな花は木なれやうの山
たかくふうた花もさうの山路哉
御も一のやう松も埋む花乃雲
幾年うえはてぬ花乃う一の山
みよ一のやうもあらぬも花の友
吉野山こそえ一の花はたくもう
花乃浪きやう一の川たろ
御も一のやかくと雲さへ花は山

志をりせぬるは花らん一の山
つれまでう花乃吉野を旅は宿
一目もも千は花や芳野山
よ一の山様はあらぬ木もも
花まざくらちるや流も一の川
月夜も一の吉野乃峯の花は雲

已上

又予が是まで鑄石せ一糸句所くはあ

まついでにけ出さん初瀬山学寮以成よ
 日れ新もあゝるう雲間の夏乃ぬ
 同トく文殊院の南れかゝ乃庭もせに
 曇るなるよ今夜名残れその月
 同トく歡喜院れ春日明神の宮乃前よ
 百年れなるばも花のこくろろり耶
 むさゝの宝珠山乃東南れ石塔の腋に
 清らうよちるを蓮乃名残か南

五月屋を雲まよふなるよ西れを
 年れもやみみのさうひ乃玉祭
 同ト郷の月讀乃屋をろれ石碑の末よ
 神さびー木か夢や月の宮所
 東都油嶋金剛寶阜れひんがト乃芝山に
 白雲乃うへも真まろや富士れ名
 今朝るればうとて遠一不二の山

巳上

連歌茶話別集

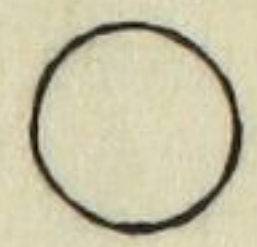
百三十一

○
むろー誹諧師夢太ろ五月雨れ発句よ
さみぢれやある夜ひそくに松乃月
とりよを清人程劍南といつるもの詩
よつくまてうく

長夏艸堂 寂_キ 連宵聴_テ雨_ヲ眠_ル
何時_カ懸_ニ月_ニ色_ヲ 松影落_ツ庭前_ニ
といつり已上ろ南畝莠言にみえきり

又予が昔年堺よて獨吟一折の連歌よ
をくれて朝日にうごく柳う那
とつかふまのまゝ発句をそのうち長
崎よて異朝れ江芸閣とりよ人からう
きにつてきてかく
雨暗_テ宿雲散_ス 日出_テ曉風吹_ク
寂_ク芸_ノ牕_ノ下 緑楊弄_ス嫩_キ絲_ヲ
といつり案どるよけ詩も発句れ姿情

と聊う異なれども唐人乃所爲よて免
づらうられバ夏に寫置ものなり



戊寅臘月より油嶋よ七年をこ傳りて
と一々の春夏秋冬れうのまかたる
景氣をるるにまゝ境内とちられぬ鶯あ
まてはのねもたいをなくもあかねさ
と於日乃出る比よりゆふつうさまで

ひねもを木傳ひ啼てくろをなぐさ
免殊よこれわさるるうぐひをむ
一京都よりくご一たるものまねよて
なくこゑも色音も一入あざやうにう
るは一くさこゆるゆり傳めるなり又
夏よりゆれば時鳥さるるてひさか
れをを飛かふりりさま餘野よことな
るてまゝをさくのとならず姿も度く

みえぬ雨のふるもはるくにも雲路
は啼もれべ日くにくもぬしてうちあふ
むと半天をなぐ免くらしていと面白
くくちよた風情なり又秋よなれば
そゆらま乃わくりきてあまられ隅田
川のほとり遠くえやればあしたよ
も川上へゆきゆふな川下へゆき
いくつらとらふうづりもなくひと

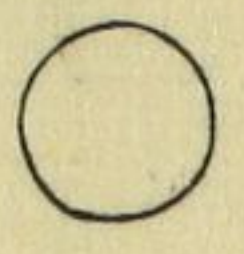
らよ二十羽三十羽づつほらもみされ
ず飛わさきて繪よかくとも及ぶまど
る景色にてあさぬゆふなよえわさ
てたいをやいなふきをけともたれま
りり又冬ようのれべ上野乃池此面よ
水多かずくちのまりてたりのあ
しと目のまへにえたろして佳景りふ
をくりなす誠よ宝阜のころをなぐ

さぬにいぢ屋ーなりひぢもまろふ樂ー
て老人乃保養するまことぢのたよろ
しき栖りなりその時くにまんで祭句
もあまゝあれどもまむらく一句づ
爰よ出ーをくものなり

うぐひまのちのまや窓れ日影
作るらんちやうぞらよぬく郭云
飛鷹をあさぬゆふなの孫免か那

水多れうぐよにたまたつ羽をく南

已上



老衲もはやことー古稀乃年よなんく
とーて露れ命のさえうせん程乃遠う
らざる處を事を想像てさらばくろ
みよ辞をれ祭句をつくらむやと欲ー
て案もるに春夏秋冬の四季乃中よ

きりぎりれの時にう息れ緒乃きえをん
こともはうまがさられむいづいせん
と思慮を免ぐらまよれもへらく四季
にをのく一句づゝ作らむりぎりれ
辞をよならざらんやいと朽もひな
て案ト出せる四季れ案句

いさのをれたゆるるもむ乃木陰うぬ
息乃緒のをゆるるも夏れ川遙か南

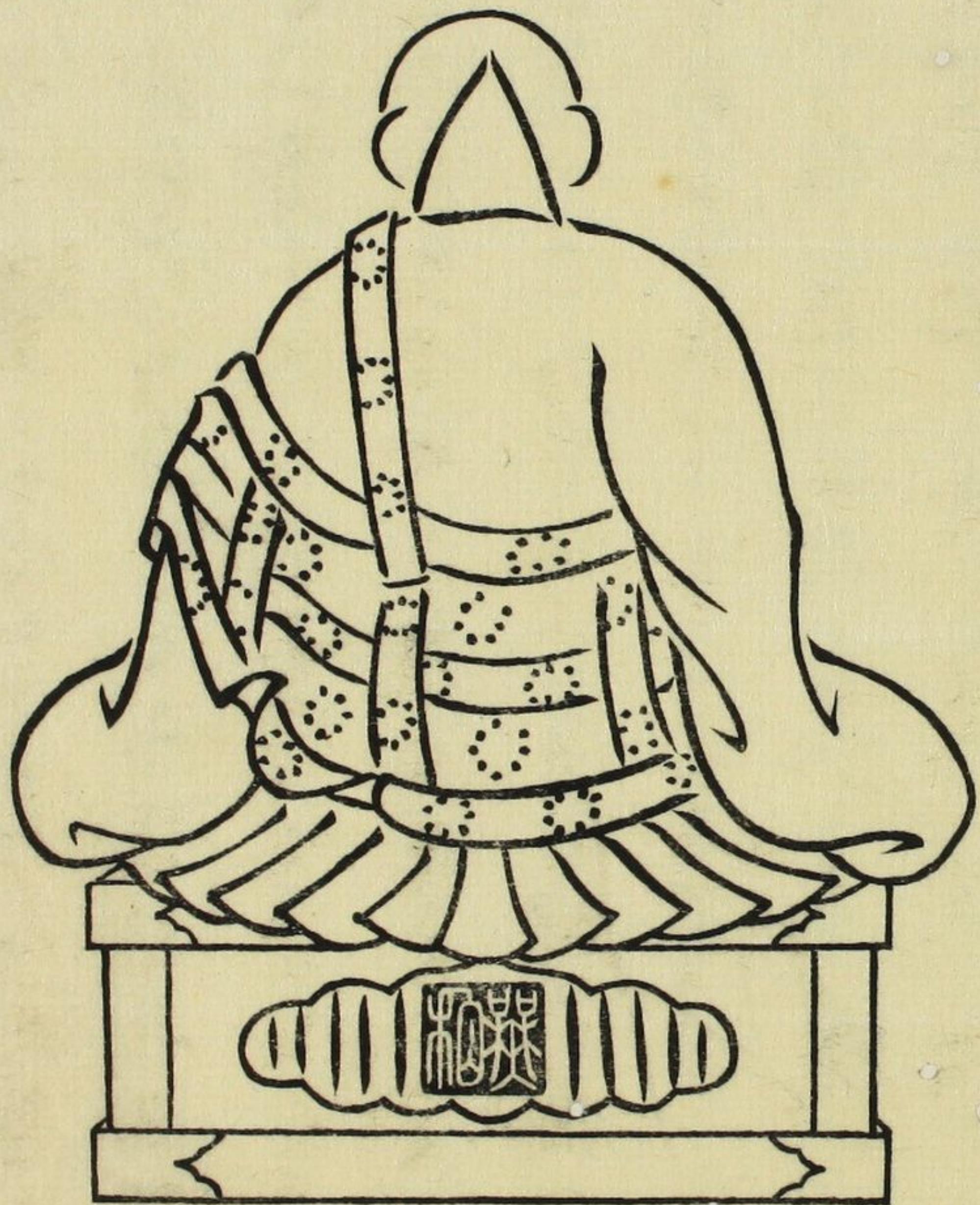
いたれを乃たゆるるも月のゆふべ哉

息の緒れをゆるるも雪乃河一たり那

られを屋のくれ命終のくちよえたま
はん人くも機根萬差なればよを拍て
笑ふものも何るべし足をまをてかな
あふとれもあるを鹿言軟語第一義
諦なれをりぎりれもわがき免乃廻向人
なら舞うも穴賢くく

又二十四五年よりもなるらんを豊山よ
 て大病わづらひしころ最期に画賛を
 かきて弟子どもにあはれをたしが観
 世音乃利生よや其度またをかき今に
 なぐらへてあまらりその時乃画賛も
 ちなみようのしをくものなり

生_レ之_キ 死_ニ之_チ 哭_シ之_ラ 笑_フ之_ラ
 笑_ハ哭_ク 死_ニ生_ス 之_キ之_キ 之_キ之_キ 之_ラ



在原業平乃辞世此歌伊勢物語卷末

はるよゆく道とひうねてまゝいかど

さのみふとは思てざりてを

歌註第三曰古註にさのみまてひらみ

とちたもはざりて我と云てらくろあ

まりて詞をらぬ歌といつり當流とい

うちまかせてまゝさのみおもこの思

はざりてをといつりまことよあられ

もふらくやゆるらんこれ世上此人ご

そのらくろなるべうたゞそのまのな

る處いかへまぐ知べくこそ傳らる

といつり

又最明寺時頼此辞世乃頌東鑑第五十

一卷曰葉鏡高懸三十七年一槌打碎

大道坦然といつり

予先は續門葉集の第十か多きる本を
閲してその朽もむさを茶談前編に終
にあるせむそのうち山州名跡志をえ
るは續門葉集第十卷に十住心乃中の
第一住心乃歌をのせてあるこれに
よみて群書類従に載せる本を一覧を
るは第十これあり其中に第一の住心

より第十乃住心まで此歌あり今志を
らく初中後の三首を爰は出さん
第一異生羝羊心此中に三辰戴頂暗同
狗眼といつるころを

權律師頼驗

さくら—
なをそのうへもくらさふも
第六他縁大來心乃中に唯識無境のこ

ろ城よ多る

權少僧都道順

爰れをよるることのみをむすくして
ふひどのそまことちるるる
第十秘密莊嚴心れくろよて生死涅槃
といつることを

法印頼瑜

巻の中をいふふうつもゆ免なれ

さなから爰そらゆくちるるる

同第九卷雜部は曰先師僧正成賢にを
られてのち彼あと報恩院はこもりぬ
て年月をかさねてをこななれらるこ
ろ人のもとよりをとづれ侍るる返
事よそへ侍りらる

權僧正憲深

志をの戸に人めをいふ身なれとも

とふいさいさうよろれーかまらり

又僧正成賢よりの弟子どもの中へつら

そーたる歌

ちさるをくまのふなくと露の身は

たえなん後もあとをまのねよ

又大僧正聖兼因屋前攝政は臨終は

事をさく免たてまのまらる時に鐘を

らしてよとある歌

今もどてれたらむとむるかねのまは

まえぬとさくやうたまらるらん

又意教上人阿弥陀院の池はにー多乃

那くたるとる時あまごぶあいの五字を

句はかーらよをさてよ免る歌

あまれなりみさばのたーもまの波は

ふちせにうたるとつぬ乃わくれん

巴上

通雅詩集

政八年
睦月之吉

茶談
續
集
成



44

